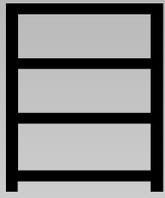




- 同窓生参加型に誌面大幅刷新
- 寄稿文随時募集中



CONTENTS

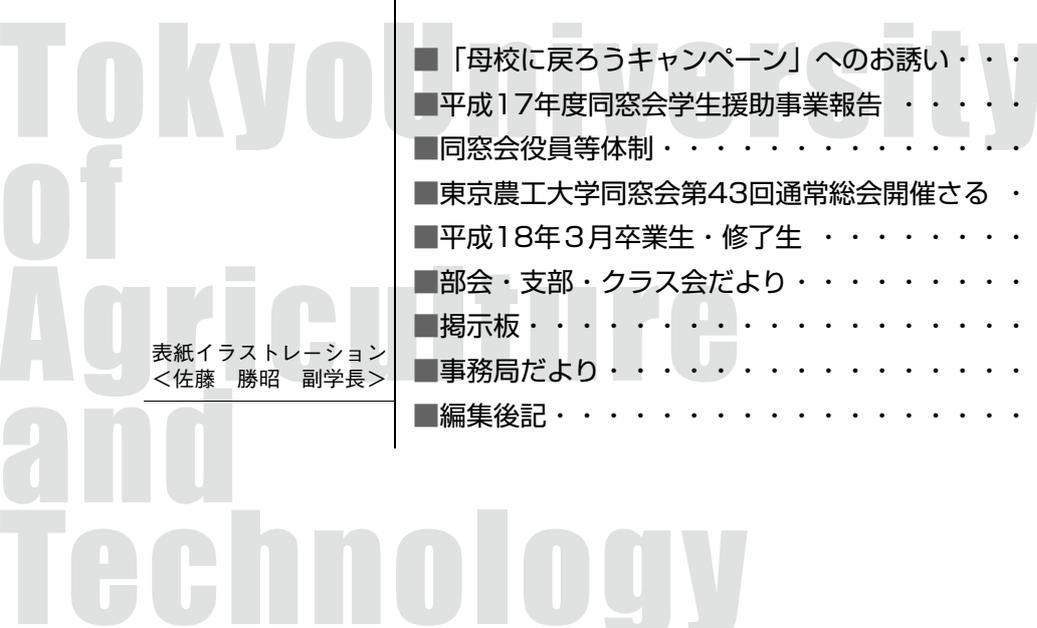


農工通信



表紙イラストレーション
 <佐藤 勝昭 副学長>

■同窓会長挨拶	3
■新旧理事長挨拶	4
■同窓生からの寄稿	5
戦時下の学園生活	登坂 秀 (農S18.9) 5
農工大囲碁部と私	仲谷虎之助 (農化S25) 5
実学の発展を	横関 健三 (農化S46) 6
農工大の思い出と近況報告	平野 繁 (農工S58) 7
私の農工大の頃からこれまで	野上寛五郎 (林S39) 8
農工大の産学連携と活性化への支援	深水 智明 (織工S38) 8
工学部120年史雑感	澤田 孚夫 (機械S40) 9
繊維博物館でのボランティア活動	壁矢 久良 (織工S35) 10
東京農工大学後援会のあり方	阪上 信次 (前後援会長) 12
同窓会にお願いしたい	梶井 功 (後援会長) 13
同窓会の出番です	山本 雄三 (農化S33) 13
四国遍路体験記	門屋 一臣 (農S33) 14
ラグビー部創設の頃とその後	加藤 公朗 (林S30) 15
中越地震の記録	布施 康正 (獣畜S20) 16
随想	屋敷野ナツ (教婦S24) 17
出来る、出来ないの分かれ目はなにか?	長島 徳明 (織化S37) 17
ビニロンのことなど	谷井 宏邦 (工化S38) 19
クルマが無くなる時代	今成 昌文 (機械S57) 20
モンシロチョウの花嫁衣装	小原 嘉明 (農S39) 22
動物医療あれこれ	金重 辰雄 (獣医S50) 22
自然を大切にすることを	西尾 邑次 (農S17.9) 23
蚕種で生きた、島村今昔	関口 政雄 (養蚕S30) 23
またぎの里『阿仁』で林業に携わって	福森 卓 (環・資H8) 24
アスベスト (石綿)	武田 博之 (工化S38) 25
東京支部への期待	細溪 美古 (林S25) 28
同窓会支部会運営の課題	渡辺 寿一 (獣畜S25) 28
しまなみ海道の近況	池上 正彦 (蚕糸S52) 29
日本シルク学会へのお誘い	三戸森領夫 (製糸S31) 30
「武蔵野山梧会会報」第47号	井上 勝弘 (林S35) 31
市民農園国際会議に出席して	廻谷 義治 (農S38) 32
■「母校に戻ろうキャンペーン」へのお誘い	33
■平成17年度同窓会学生援助事業報告	34
■同窓会役員等体制	36
■東京農工大学同窓会第43回通常総会開催さる	37
■平成18年3月卒業生・修了生	40
■部会・支部・クラス会だより	46
■掲示板	48
■事務局だより	50
■編集後記	51



同窓会長挨拶

「農工通信」「ホームページ」
のリニューアルについて

同窓会長 畑中 孝晴

(農S31)

盛夏の候 同窓の皆様にはお元気でお過ごしのことと存じます。

平成18年度の総会もさる5月27日に無事終了し、恒例の懇親会も皆様のご協力で作られた50周年記念ホールでなごやかに行われました。また、前日に開かれた副会長、支部長懇談会では建設的なご意見を沢山頂戴することができました。

今回の総会では、従来からの懸案であったいくつかの課題について討議決定されました。その一つが「農工通信」とホームページの充実です。

長年にわたって同窓生の架け橋となっていた「農工通信」については、各分野で多彩な活躍しておられる同窓生の投稿を増やしたり、もっと読み応えのある会誌にせよとの意見がしばしば寄せられておりました。そこで本号から、次のような基本方針のもとで装いをあらたにして発行することといたしました。

- ①表紙をフルカラー、デザインも変えイメージを一新する。
- ②同窓生の寄稿を大幅に増やし交流の場とする。
- ③部会、支部などの活動報告は、徐々に今回改善されるホームページへ移行する。
- ④母校の関連記事ものせ連携を強化する。
- ⑤発行は年一回、雑誌形式とし、ボリュームは50ページ程度とする。

リニューアル第一号の本号には、多くの同窓生から玉稿を頂きました。また、表紙は副学長の佐藤勝昭先生のご好意で、正門から本館を見たさわやかな風景で飾ることが出来ました。これからも毎号佐藤先生が描いてくださるとのこと、紙面を借りて改めて御礼申し上げます。

農工大はITなどの研究で最先端をいっている

のに、ホームページは貧弱で、いつまで紙媒体にばかり頼っているんだとの声が若い人たちの間にありましたので、今般、ホームページも下記の考えのもとに全面改訂をいたしました。今後、行事予定、支部等の活動状況、写真などもどしどしのせていきたいと思いますが、一定の基準が必要です。早急にルールを定めることとしております。

- ①わかりやすいデザインと同窓生に有益で新鮮な情報を提供する。
- ②速報性を活かした情報発信で「農工通信」をバックアップする。
- ③文字情報だけでなく、写真情報の充実をはかる。
- ④部会、支部との連携を一層深める。
- ⑤必要に応じパスワードなども検討し、徹底した情報管理に努める。

こうした媒体を通じ、若い人々も含めて同窓生間の一体感を醸成していきたいと願っておりますが、「農工通信」もホームページも改訂したばかりですから内容にもいろいろご意見があらうと思います。

感想、要望、批判なんでも結構ですが本部までお寄せ頂き、より良いものにしていきたいと思っております。

なお、従来、ホームページは大学のサーバーを利用して頂いておりましたが、今回独立し、直接アクセス出来るようになりました。(http://tuat-dousoukai.jpn.org/)

理事長に就任して

理事長 生原 喜久雄 (林S41)

この度の43回通常総会におきまして、畑中会長から平成18年～19年両年度の理事長就任を拝命しました。開校以来120余年の長い歴史と伝統をもつ本同窓会の理事長に使命されたことは、大変、光栄であるとともに、その責任の重さに身の引き締まる思いを感じております。

同窓会会則には、第1条に本会は会員相互の親睦を深め併せて同窓並びに母校の発展を図ることを目的とするとしています。そのために、同窓会本部は、会長の指導、常務理事の協力および有能な事務職員によって運営されております。平成14年2月に同窓会資金で事務室および会議室が建設され、生協地下の暗い手狭な事務室から開放され快適な環境で日常業務を行っております。

皆様もご存じの通り、最近の本学の発展は素晴らしいものがあります。一方、法人化による民間的な発想の経営手法の導入、第三者評価による競争原理の導入、教育・研究活動の外部評価など取り組む課題も多くなっています。これからは、同窓会と本学とのチームワークが益々重要になってきます。大学がより発展するためにも同窓会と大

学とのより一層の協力体制の確立が必要です。

松岡前理事長からの申し送り事項(宿題)として、同窓会の業務・組織に関しては、常務理事の負担軽減、活動のPR、同窓会の法人化、各種規則類の整理・統合があります。また、同窓へのサービスとしては、平成21年度の名簿の発行について、年1回発行の農工通信の充実、ホームページの充実・活用、部会・支部活動の強化、準会員(学生)への援助の充実などがあります。全て重要な項目ですので、順次検討していく予定です。その他にも検討すべき課題が出てくると思われしますので、その都度対応していくことにしています。

同窓会の活動は約3億円を基本金として2800万円規模の一般会計および必要に応じて特別会計で行っています。財政的には苦しく、財務の見直し等を行って効率的な運営に努力していますが、収入増を図る必要があります。賛助会費増の推進や会費未納者への終身会費への切り替え等の推進を考えています。ご意見がありましたら、ぜひお聞かせ下さい。畑中会長とともに、「会員相互の親睦」および「母校の発展」のために、微力ながら尽力する所存です。皆様のご支援をお願いし、挨拶とします。

理事長退任の挨拶

前理事長 松岡 正邦 (化工S43)

このたび2年間の任期を終えて生原先生に引き継いで正直なところほっとしております。同窓会の仕事から長いこと離れていましたが突然理事長の指名を受けて戸惑いながら始めました。早いもので2年間の任期が過ぎました。当初、私自身は同窓会と大学の協力体制の確立に重きを置いて任期を全うしようと考えておりましたが、実際にはそれに加えて、名簿の発行、個人情報保護法への対応、同窓会業務の整理、農工通信やホームページの改革などの急を要する仕事如山積みで、それらを急ぎ足で凌いでいるうちに2年間が過ぎてし

まいりました。

幸いにして同窓会事務室は、農学部キャンパスから大学本部のある道路向に新たに建設された建物に移ったばかりで、それまでとは違って明るい部屋で、豊かな木材の香りに包まれていました。このような環境で仕事できたことに感謝しています。2年の間、学内の常務理事の方々から頂いたご協力には感謝以外の言葉が見つかりません。事務局の方々にも大変お世話になりました。末筆ながら同窓会のより一層の健全な発展を祈っています。

同窓生からの寄稿

戦時下の学園生活

登坂 秀 (農S18.9)

卒業してから63年経った。同窓会会員名簿を見ても戦前、戦中の卒業生は数少なく、一番先の方には載っている。政治も社会も若い人の時代になっているが、その昔を振り返ってみたい。

昭和16年4月入学、同18年9月の繰上げ卒業まで、まさに戦時下の学園生活だった。東京帝国大学農学部実科が廃止となり、東京高等農林学校に生まれかわった数年後のことで、まだまだ農学実科の伝統や習慣が引き継がれていた。

入学早々連日の開墾作業、農学実科の俗謡を歌いながら交流した駒場寮時代、各学科が実科時代ののぼり旗をかざして覇を競った運動会。農学科のクラス全学生が参加した満州建設勤労奉仕隊による北満（現在の中国東北部）の特設修練農場での実習訓練。どれも懐かしい思い出だ。

現役の陸軍将校による軍事教練を受けたのは、旧制中学校時代と同じだが、千葉県習志野や静岡県御殿場の陸軍演習場で実践的な戦闘訓練を受けたことが忘れられない。また関東大学、高専の軍装による早駆け競争に参加し、歩兵銃を担いで明治神宮外苑水泳競技場から井の頭公園までの往復を懸命に走ったことがあった。臨席の高級将校が、完走した学生達に「諸官らは国軍の中でも強兵の部類に属する」と称讃したが、早く軍隊に入ることを持っているという感じだった。

昭和18年には学徒戦時動員体制がとられ、上級学校は「皇軍幹部養成所」として、陸海軍はそれぞれ士官候補の募集を行ない、報道は連日の如く、学徒の「海鷲」、「陸鷲」をたたえて、大学、高専学生の心をゆさぶった。

こんな時代だったから、修学年限が短縮され、昭和17年3月卒業予定の先輩学生は、16年12月に繰上げて卒業となり、殆どの方が兵役に服した。その翌年からは卒業が6ヵ月繰上げされ、19年3月卒業予定だった私は18年9月卒業となり、農林省総務局に就職したが、2ヵ月後の12月1日に入隊した。終戦後農林省に復職したが、昭和48年に退職し、地元の渋川市長を20年間勤めた。

こんな環境ではあったが、専門の学習には熱心に取り組んだ。

当時は、農は国の本なりとして、農山村の振興は国家経営上最も重要な問題であった。学園は、学術の理論及び応用を教授し、それを攻究すると共に、農山村の中心指導者を養成する国家的な施設でもあった。そのため学生達の意気込みも違っていた。

署名な教授も多く、学生達は誇りをもって勉学した。作物学や遺伝学、動物学や害虫論、農業経済学、農村史など、それぞれが得意分野の学習に励んだ。強い国家意識を持ち、やがて戦場に赴く身をお互いに励ましながら学んだ学友の姿が忘れられない。

農工大囲碁部と私

仲谷虎之助 (農化S25)

我が家は国分寺駅に近く農工大へも車で十数分の距離にある。農工大囲碁部の学生達と縁あって交流を持つようになったのは昭和58年の春頃であった。その当時は部員数5～6名前後で関東学生リーグの7部とか8部を低迷していた。

囲碁の楽しさを知り、囲碁から多々の恩恵を受けた者は次の世代にそれを継承させる義務があるとの思いと、母校への恩返しという思いとで、囲碁部の面倒をみる気になった。農工大の学生は頭もいいし、素朴で素直な学生が多い。自分の孫世代の学生達とつきあうのも楽しいし、合宿やコン

パ等随分と行動を共にした。又忘年会などは全員を我が家に招き徹夜で遊んだりもした。テコ入れして部員数を増やし、部長になってくれる囲碁を愛する教授を探せと激励し、白羽の矢が当たったのが高橋明善教授であった。高橋先生は本当に学生の面倒を良くみて下さった。定年退官に際しては後任に美宅教授を推薦し囲碁部の発展を支えて下さった。梶井 功学長（当時）も囲碁部に大変協力的で、大盤の解説碁盤をポケットマネーで寄贈して下さいました。そして、卒業した囲碁部のOB達も後輩の面倒を見るという良き伝統が育ちつつある。

囲碁部の思い出で一番印象に残っているのは女性入部第1号の八木敬子さん（5段）と囲碁部員佐藤 真君との結婚式だった。囲碁部員同士の結婚！（勿論卒業してからです）部長の高橋教授と顧問の私、囲碁部のOB、現役の部員達みんなに祝福されての結婚式。そして、結婚特集号が発行された。お二人の幸せを願ってやまない。

もう一つ楽しかった思い出が残っている。平成2年度の私の年賀状の題材になった事象だが、当時の私の心境を言িয়েて妙なので再録し、皆さんに御披露したい。

「明けましておめでとう御座います。今年も年賀に寄せて年に一度のお便りを申し上げます。昨年度は私も還暦を迎え兄弟達をはじめ、ゴルフ仲間、飲み友達等々色々な方々から還暦祝いをして戴きました。なかでも一番嬉しかったのは私の母校である東京農工大学の囲碁部の学生達のお祝いでした。合宿の最終日打ち上げの時、全員がとほしい小遣いを出し合い、サンローランの素晴らしいタイピンをプレゼントしてくれました。心のこもった添え文をそえて。

その日は嬉しくて学生達と痛飲致しました。心に心が反応する世界がとっても嬉しかったのでした。まるで高校野球部監督の様な心境でした。



人生は感激の連続がより一層人生を意義深いものにさせるように感じます。これからも囲碁部との交流を続けてゆきたいと思っております。平成2年元旦 仲谷 虎之助」

現在、囲碁部員数20数名、関東学生リーグ2部に昇格、健闘しております。

私は、今年77歳の喜寿、体が大分変調になってきましたが、元気なうちは囲碁部の学生達との交流を続けたいと思っています。囲碁部卒業のOB達も後輩の面倒をみるという良き伝統を築きつつあります。囲碁を愛する同窓諸兄も囲碁部を温かく見つめつつ応援してやって下さい。（平成18年2月記）

実学の発展を

横関 健三（農化S46）

21世紀の技術課題といわれている「健康」、「食糧」、「環境」、「資源循環」の何れの分野においても、バイオサイエンス・バイオテクノロジーが大きなインパクトを持つことは論を待たない。しかしながら、圧倒的な力と勢いでこの分野の先頭を走っているのは、残念ながら日本ではなく米国である。米国の強さは、「独創性を重んじる風土」、「起業家精神」、「潤沢な予算」、「数多い優秀な研究者」、「ハイリスク・ハイリターン」の技術開発を目指したベンチャー企業の育成、そして「バイオテクノロジーを世界制覇のための戦略として位置付けた国家規模での取り組み」等々、色々な観点から論じられている。このことは、ノーベル医学生理学賞、化学賞受賞者の多くが米国人であること、遺伝子組換え、PCR等の基盤技術、ゲノム、トランスクリプトーム、プロテオーム等に代表される応用を目指した網羅的解析技術等の多くが米国発であることも窺い知れる。

日本の現状は、米国の先端基盤研究に“追いつけ”に精一杯で、かつての強みであった実学の部分が希薄になっているように思う。かつて、農芸化学の先駆者達は、世界に誇る独創的な発想で産業の創出に貢献してきた。事実、1980年代には、バイオテクノロジー分野で米国の一番の強敵は日本と言われていた。これは、日本の風土に根ざし

た伝統的なバイオの技術基盤が大いなる脅威であったためであろう。アドレナリンの単離、世界初の酵素製剤タカジアスターゼの工業化（ともに高峰譲吉博士）、昆布のうま味本体が、グルタミン酸であることの発見（池田菊苗博士）、更に鰹節、椎茸のうま味本体が、それぞれグイノシン酸、グアニル酸であることの発見（それぞれ児玉新太郎博士、国中明博士）、ビタミンB1の発見（鈴木梅太郎博士）、小麦グルテンの分解法によるうま味調味料・グルタミン酸ナトリウムの世界初の商品化（味の素㈱）、グルタミン酸生産菌の発見と発酵法によるグルタミン酸生産の工業化（鵜高重三博士、協和発酵㈱）これを契機とした種々のアミノ酸、核酸関連物質の発酵法による工業化、微生物凝乳酵素の発見と工業化（有馬啓博士）、コレステロール合成阻害剤コンパクチンの発見とメバロチンの工業化（遠藤章博士、三共㈱）、更に発酵法では製造が困難なL-DOPA、アクリルアミド等に代表される有用物質の生産方法の開発と工業化（山田秀明博士）、免疫抑制剤タクロリムスの発見と工業化（現アステラス製薬㈱）等々の先駆的業績が挙げられる。

このように眺めてみると、日本発の技術には「日本の強み」が感じられる。欧米の土俵と異なる「実学という土俵」の上に立脚して独創性を発揮している。うま味物質の発見は、味にうさく、味を追求する日本人ならではの発想であり、発酵法、微生物変換法による技術革新においては、目的とする優秀な微生物が存在することを信じて、コツコツと探索する「ねばり」と「採取された微生物から新しい現象、理論を学ぶ」という、まさに研究に対する日本人の根気強さと誠実・謙虚さが窺える。

筆者も、企業研究者として常に実学を意識する立場からバイオ分野の研究開発に携わってきた。幸いにもDDI（抗エイズ薬）やペプチドの生産等、いくつかの感激するブレイクスルーを経験し、「もの」を生み出すことで社会に貢献してきた。日進月歩の最新技術をいち早く導入しつつ、欧米の「ものまね」でない「日本の強み」を生かすことを常に念頭に置くことが大切であると考えている。特に、日本の将来を担う若手研究者に、とりわけ実学の学府たる農工大の卒業生に期待す

ること大である。日本は物理的資源に乏しく、知的資源で世界と戦う以外に道がないからである。

農工大の思い出と近況報告

平野 繁（農工S58）

大学を卒業し、早23年が経過しました。しかし、入学時のことや寮寮での生活など、昨日のように思い出されます。

私が入学したのは昭和53年4月、農学部農業生産工学科で通称「生産工」と呼ばれるところでした。農工大の学生は「まじめな技術屋」というイメージの中、土方が着るジャンパー（どかジャン）で作業着姿の「生産工」の学内での評判は「荒くれ者」という感じだったと思います。

それでも、私が学んだ農業土木の先輩方は、「農業は国の基礎であり、100年の計を立てて行うもの」という考えのためか、国や地方公共団体の職員となられる方が多くみえました。そのため、入学時から、私も「国や県の職員となるのかな。」と漠然と考えていたように思います。

ある先輩の教えに「学校での勉強は3年生の3月からしたらいい。それまでは人生勉強を。」と言うのがありました。正しいのか、正しくないのか、今もわかりませんが、なぜかその教えだけは印象に残っていて、当時は「そうしなければいけないのだ。」とっていました。

その後、私も地方公共団体（三重県）の職員となり、食料の安定供給を含めた多面的機能の維持発展のため、農業生産基盤の整備を中心に、仕事を行っています。

確かに、社会に出たとき「もう少し大学で基礎的な学習（土質学等）をしておけば楽なのに。」とは思いますが、社会に出て課題に直面した時や将来のことを考えた時など、どうしてもやらなければいけなくなりますので、そのときに真剣に勉強をすれば、いいのかなとも思っています。

最後に、三重県にも、同窓生は多くいて毎年三重県支部の同窓会を行っています。同じ学科である農業土木出身者は私だけであるため、寂しい思いをしています。三重県は気候が温暖で、人も穏やかで、住みやすいところです。農業土木を専

攻している学生はもちろん、一度、三重県で働くことも考えられたらいいと思います。相談にのりますよ。

三重県支部の同窓会で待っています。

私の農工大の頃からこれまで

野上寛五郎 (林S39)

農工大農学部林学科を卒業して42年になる。農工大時代から現在までの大ざっぱな経緯を振り返ってみると、私の場合、当時の学生生活は人生にかなりの影響を与えているといえるようである。

1960年の入学当時、農工大農学部の正門と本館の間の両側には大きなケヤキの並木があり、学内には樹木が多く、環境のよい、静かなキャンパスに、来たという印象で内心喜んだ。すぐ、駒場寮に入れてもらい、そこで4年間お世話になった。寮は古い木造であり、相部屋の万年床であり、部屋はいつも汚れていた。トイレ、浴室は薄暗かった。食堂はコンクリート床に古い長机、椅子があり、その頃の食糧事情とはいえ食事は慎ましく、空腹に悩まされた。当時はその生活に慣れていたが、現在の学生の生活とは全く違うものであった。1、2年生の頃の昼間は資材の運搬、道路工事の手伝い、映画のエキストラ、競馬の見張り、ソバ屋の出前など種々のアルバイトをし、その収入で、夜は安酒を飲み、社会勉強の方はかなり充実していたようだ。4年生時にはもう故人になられた川名明先生の造林学研究室を専攻させてもらい、先生の野外調査に何回も連れて行っていただき、もちろん卒論も含め、いろいろ厳しく指導していただいた。後に大学の教職につくことになったので、農工大の関係の先生方にはその後40年以上にわたり何かとご指導、ご高配いただいた。私の農工大の学生生活は学生の本分の不履行を反省しつつも、自由な、よい4年間であったと思う。

卒業後、福岡県春日市に帰郷し、九州大学農学部の大学院に進学した。農工大の時と同じ造林学の研究室に所属し、博士課程の途中で助手に採用され、その後約5年間は多くの調査、研究、実験実習の補助などの教員としての基本的な仕事をさ

せてもらった。1972年に宮崎大学農学部へ転勤し、そのまま昨年の退職まで、32年余農学部と農学部附属演習林（5年前に田野フィールドに名称変更）に勤務した。その間大学では学科の改組、法人化などの影響を受けたが、自由に教育、研究をさせてもらった。合計37年の教員生活をなんとか遂行できたのはやはり農工大時代に受けた教育、寮生活、クラブ活動、アルバイトなどの体験が支えになっていると深く感謝している。

昨年9月下旬に福岡県小郡市に転居し、現在これからの生活設計を計画途中である。卒業以来地元同窓会にはほとんど出席しており、当地域にも同窓生がおられるので、今後も引き続き、親睦を深めていきたいと思っている。最後に農工大農学部同窓会のますますの発展を陰ながらお祈りする次第である。[2006年3月25日、記]

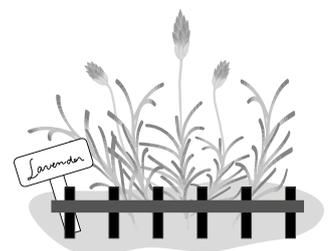
農工大の産学連携と活性化への支援 — AT-Netz —

深水 智明 (織工S38)

昨今の国立大学法人の状況はご承知のとおりであります。

総じて申しますと、大学の経営環境は国の全面的な保護から、各大学の自立を要するシステムに移行しつつあると思われます。学生の数および質の確保をはじめ、研究費の獲得等々では従来に増して大学間の競争が激しくなり、企業社会と同様とは言わないまでも、それに類する状況が生じるのではないのでしょうか。

そのような現状を踏まえ、農工大の生き残り発展に僅かにでも助力になればと、さきに、農工大OBによる“農工大産学連携支援OBの会”（任意団体）を結成し、農工大グループの産学連携、農工大発ベンチャー企業等の支援を進めてきました。そして、これまでの経験を踏まえ、この



4月に本会を「有限責任中間法人 エー・ティー・ネッツ」として法人化しました。この法人化の目的は本会が支援する事業への社会的信用の確保・責任の明確化、非営利法人の明示、そして経理面の透明化等であります。

農工大への支援については今後、教育面や就職面も含めた支援もできるであろうと考えております。さらには、企業等経験のOBによる総合的な支援も視野に入れ、大学と社会との関わりの中で生じるあらゆる活動、たとえば、今後、大学に新たに課せられるであろう社会的責任（CSR）の問題に対する支援にも広げる構想であります。

本会の基本的姿勢は、農工大グループのニーズに基づく実務的であり、かつ非営利的な支援であります。なぜならば、特にベンチャー企業にとってのニーズは実務支援であります。この実務支援には当然、コンサルティング活動も含まれます。コンサルティングレベルの支援であれば世にあまた存在します。

本会は農工大グループへの支援として、具体的には、
・農工大発ベンチャー企業の営業、生産、知的財産、契約・交渉等の業務への実務支援、
・農工大グループの産学連携業務（共同研究獲得、知的財産の技術移転等）への支援、
・農工大研究室の対外交渉関連の支援、さらに、
・教育、就職支援等々について、農工大グループの要望に応じるべく準備を進めております。

これらの支援は結果として、直接的な産学連携分野の他に間接的には、研究面で、大学教員が、いわゆる雑用に取り紛れることなく余力を生じ、研究により専念でき、レベルが高い研究成果が期待されますし、教育面で、学生が期待する実企業社会の現状を考えさせる機会を提供できるものと思われれます。

昨今の大学にまつわる情報は、従来よりも増えています。“役に立つ大学”などといういい加減なランキング情報を企業の幹部は見ています。これらを見捨てるわけにもいきません。また、大学同窓会の役割、その有用性が世に語られています。たとえば、大阪大学ではその出身の関西財界メンバーが当大学発ベンチャー企業支援グループを形成しており、慶応義塾大学ではその同窓会が産学連携支援に大学との繋がりを強めています。

これらの状況は大学の発展には自助努力が必要であることを示すものでありましょう。

農工大にはその独自の経営戦略が示されています。本会の支援活動はあくまでも農工大の経営戦略に則って行うもので、農工大の発展に、僅かにでも助力になればと考えます。

現在、本会は30名ほどの会員で活動しておりますが、農工大への支援分野は広く、多種多様であり、それに対応するためには多くの人材が不可欠であります。

何卒、本会の活動の趣旨をご理解いただきまして、本会へのご参加をお願いするものであります。ご賛同いただければ、下記へご連絡を賜りたく存じます。

以上

2006年4月20日

1963年繊維工学科卒 深水 智明

e-mail: fwnw9686@mb.infoweb.ne.jp

Fax: 0463-94-6744

工学部120年史雑感

澤田 孚夫 (機械S40)

工学部120年史の構想は、社会に呼応する本学の状況を記録すること、学生の視点に立った大学の変遷と実状を表すことでした。具体的には産業の変遷に伴う学校、大学の学部、学科の移り変わり、カリキュラムの変遷などでした。この構想には、「工学部百年史」を大学の組織の視点に立って編集したことに対し違った面から学校史を見る点で特徴があって、「工学部百年史」の委員から頂いた貴重な方針案でした。このため長い学校史における変化を具体的につかむことができます。その中に、15年に及ぶ活動を通して実現した悲願のドクターコースの設置があり、大学昇格時に開設した一般教養部の変遷と46年後の発展的解消という劇的な記録が入ります。学生生活に関しては、実生活と卒業論文に関するアンケートをまとめてありますが、サークル活動における数々の優勝歴や大学紛争当時の「学生の声」を集めるには至りませんでした。

書名について、「百年史」までは工学部のみの

記録でした。1995年（平成7年）から同じ小金井キャンパスに大学院生物システム応用科学研究科BASEが設置されて農学部の教員も半数占めるに至って、工学部関係だけでなく小金井キャンパスにある2部局を対象とするように輪を広げることとし、「小金井キャンパス120年史」とすることにしました。

農工大関係者なら、自分の大学が学校制度の変化のときに国立として全国でどのくらいの位置にあるかということに関心が深いことでしょう。1914年（大正3年）に実業専門学校として文部省管轄下に入り、その後大学院修士課程が1967年（昭和42年）に新制大学として20番目に設置され、1989年（平成元年）ドクターコースが設置されましたが新制大学として16番目でした。2004年（平成16年）大学院重点化政策により本学はいわゆる大学院大学になりましたが、大学院化した工学系を含む大学は、7旧制大学と東工大、筑波大を除いて新制大学で4番目（広島大、横浜国大、山梨大（医学工学総合教育部）に次ぐ）、ドクターコース（博士後期課程）入学定員数で見れば、本学の入学定員72名（BASEの半数含む）は試算で3番目（九州工大、電通大に次ぐ）になると思われます。最近の大学院化により分野別の分類は以前のような工学、農学系のように単純でなく複合分野から成り立っており、また学生入学定員に関しては工学関係の判定が難しくなっているため、この順位付けは120年史で触れずここではひとつの話題として記します。

本史刊行までの長期間にわたる原稿集め、細かなデータ収集と整理、執筆、編集作業は、現職の教員が仕事の合間にやる事務処理としてよほどの熱意がなければ難しい。そのため今回は複数の退職教員の作業にほぼ依存しました。この態勢は、今後の委員会活動に関しても考慮しなければならない事柄でしょう。

今やパソコンなくして仕事はできないといっただけよい時代なので、電子化した原稿を1頁ごとに編集し、電子メールで入稿する近代的な方法で印刷業者も含めて楽に120年史を刊行できたと思う方々は想像しておられることでしょう。しかしながら実状はまったく違い、旧来の写植時代と同じプロセスで編集校正するしかありませんでした。

それは多くの教員が使用しているMicrosoft社のワープロソフトWindowsによったためです。これは文章だけなら問題ないのですが、グラフ、ことに表を頁に割り付ける作業が全く意のままにならない。各教員が独自の編集の仕方で作って送ってきた原稿の体裁を整えたかったのですが、図が思うように編集できずそのままうまくいくように祈るようにして印刷業者に転送しました。同窓生である寺西氏にとっても、カラー原稿の表示も含めて相当な印刷作業であったと思われる。また表に関しては、印刷で行数が変わるため作り直さねばならず、旧来のように何度も校正しました。今回のパソコン原稿は印刷のための見やすい単なる原稿作りであって、原稿の受け渡し以外には電子化による恩恵はほとんどありませんでした。予算は学長裁量経費によって上製本とし、同時に作成したCDは工学教育部予算によりました。お蔭様で名文の連なる内容豊富な120年史が刊行されましたことに深く感謝しております。なお、本学ホームページに120年史と資料としての「校史編纂だより」を「卒業生の方へ」の欄に掲載しておりますのでご覧ください。

繊維博物館でのボランティア活動

壁矢 久良（織工S35）

1 繊維博物館の概要

東京農工大学工学部附属繊維博物館の創設は、明治19年。当時は農商務省農務局蚕病試験場（現北区西ヶ原）の参考品陳列場にはじまる。蚕病試験場はその後蚕業試験場・蚕業講習所へと発展し、参考品陳列場は標本室と改称された。その後、大正3年文部省所属の東京高等蚕糸学校・昭和24年の東京農工大学繊維学部となってからも教育と研究に資してきた。昭和37年には工学部に改組され、東京農工大学工学部附属繊維博物館となった。その後も学科増設による新研究棟の建設などと相俟って現在は本館・別館（1993年旧繊維工場を併合して別館とする）等で計3500㎡余の面積を有する博物館となっている。昭和52年には工学部の附属教育研究施設として官制化され、専任教官も配置されている。

この博物館の所蔵品の数は、初期の蚕糸関係標本をはじめとして各種の繊維および繊維製品・蚕織錦絵・生糸商標・製糸・紡績・織機・ニット等大型繊維機械・組み紐台・製紙関連品等々数万点にもおよんでいる。世界の博物館でも動態で存在するものは数少ない（3台とも云われている）。昭和2年（株）豊田自動織機製作の無停止杼替式自動織機（G型）、初期の時代の日産HR型自動繰糸機などは貴重な展示物となっている。

収蔵品展示のほか、博物館活動としては学芸員養成課程の教育、友の会サークル活動、講習会、講演会、子供科学教室などが行われており、我々繊維技術研究会のボランティア活動もユニークな存在である。



図1 無停止杼替式自動織機（G型）



図2 HR型自動繰糸機

2 繊維技術研究会の誕生と活動

大学の使命である教育研究の組織は常にその時代の要請に応えるべく改革は進められてきている。繊維の教育研究を中心に行い、繊維博物館に深く関係していた学科として昭和50年代後半までは製糸学科と繊維工学科（46年に繊維高分子工学科に改組）があったが、現在では生命工学科・有機材料化学科へと改編している。したがって、繊維プロパーの学科はない。

そんな流れの中で、筆者が繊維博物館に関っていたこともあり、繊維技術の継承の重要性が認識されて「繊維技術研究会」誕生の運びとなったのである。活性化した繊維博物館を目指すには繊維技術に関ってきた人材の支援が必要とされていた状況でもあった。

初期の活動は大型繊維機械の動態展示が主たる活動であったが、会の規則にあるようにその本来の目的は繊維技術の伝承並びに調査研究であり、技術発展の過程を詳らかにしてその思考から将来への指針を探り次世代に伝えることである。これは何も繊維技術に限らず全ての分野に通ずることで正に温故知新であり教育の原点であると考えている。

そんな思いに共感する方々の集いが本会であり、東京農工大学出身者を中心として繊維関連会社で重責を担ってこられた方々の集団である。現会員は23名で農工大学出身者15名、他大学出身者など8名である。

活動内容は多岐にわたり、繊維機械類の保守整備・運転、講演会、来館者への対応、学生授業への協力、調査・研究・研修などがある。なお、会員はそれぞれ専門分野（例えば製糸・紡績など）が異なるため得意分野を分担している。

テレビ・出版業界などの取材にも協力している。繊維博物館ニュースでは、当館で展示している動態機械を中心として当研究会が解説を連載している。オリジナルグッズの製作（ジャカード織機による「NOKO DAIGAKU」の文字入り正絹紋織でネクタイ、熱転写マーク入り綿靴下）も試み好評を得ている。

3 ボランティア活動を体験して

発足当初の会員は9名で多くは現役引退後かなりの年数が経過していて平均年齢は60代半ばを超えていた。6年余を経過した現在は若手?の入会者も増えて23名となっているが平均年齢は大差ない。部品代などの足しにしようと、来館者に義捐金のお願いもしている。浄財をいただいた方々には前述のオリジナルグッズをお礼として差し上げている。

願わくば年間百万円ほどの予算をと願う日々である。

我々は微力ながら繊維博物館を支援しようと志

している輩の集いである。一方で、暇を持て余した老人集団が好き勝手に繊維機械と戯れていると思われたいとも限らないが……。

「会の誕生」の項で述べたように、将来の技術開発の礎となる技術の伝承・調査研究を目指して活動しているが、年々の高齢化は悩みの種である。卒業生各位の中で“一肌脱ごう”と思われる方がおられたら是非ご来館いただきたい。

紙面の都合で説明が不十分となって申し訳ありません。やや詳細な内容は昨年11月に財団法人たましん地域文化財団が発刊した「多摩のあゆみ」(120号)をご参照いただけると幸甚です。

東京農工大学後援会のあり方

阪上 信次 (前後援会長)

後援会は一昨年に設立25周年を迎え、25年間の業績を振り返って「財団法人 東京農工大学後援会25年史資料」を編纂しましたが、あらためてそれを見ますと、大変大きな事業を遂行してきていることがわかります。

当初、同窓会からの4,800万円の寄付と入学者父兄からの特別賛助会費を基本金として昭和54年1月に財団法人として認可され、爾後「創基百年記念募金」、「創立40周年・全学博士課程設置記念募金」の2募金事業を経て基本金総額3億1千万円、それを基金としての果実と入学者父兄の賛助会費で毎年、年平均1,016万円、通算2億7千余万円の母校援助をこの25年間に行ってきました。

昨年4月に梶井 功元学長が後援会会長に就任され、私は会長の任を辞しましたが、私が会長を務めた6年間はバブルがはじけ、不況、デフレ、ゼロ金利時代が続き、基金の金利を基本としての十分な後援事業の遂行が困難で、基本金は取り崩さないことを守りながら、最高時1,700万円だった年間援助金額を800~1,000万円に減額し、しかもその50%近くは毎年の入学者父兄からの賛助会費を充てることで援助事業を何とか継続してきました。従って正直言って援助事業の量的画期的改善は低金利からの脱却を待つ他はないとの思いでした。

一方この四半世紀間の東京農工大の発展・充実

は目覚しく、しかも日本の大学制度、設立環境が急速に変貌しました。国立大学の独立法人化はその顕著なことの一つです。後援会の母校援助のあり方も当初のあり方の踏襲のみでなく、大学の発展・変化に即して有効適切な援助事業に改善する必要があります。

上記「後援会25年史資料」発刊に際して「これからの(財)東京農工大学後援会」と題して後援会理事を中心とする関係者10名出席の座談会が催され、財政状況の現状、大学及びその環境の変化を踏まえての後援会事業のあり方が議論されました。

この座談会では、現在の経済状態で基金を増やし援助事業を拡大することは当面極めて難しいものの現規模の援助事業を継続しながら大学の変化に即して事業内容の適正・有効化を図るべき課題の幾つかが明らかにされました。その主なものを挙げますと、

1. 援助の内容を寄附行為4条4項(注記)の範囲で拡大運用し、より幅広く有効な援助にする。
2. 学生父兄の賛助会員の増加を図るとともに、毎年の援助額の50%近くを賛助会費で充てている現状から、「学生への修学上の諸指導に対する援助」を学生に対する修学上の援助の主旨も含めてより強化し、その具体的活動内容が学生及び父兄によく見えるようにする。
3. 援助金の効果的活用について(例えば重点化など)大学側と後援会との連絡をさらに密にする。
4. 後援会側も大学側も援助事業の内容及びその用途についての評価機関を設ける。
5. 募金期間でない現在も、免税措置をとって個人、法人の寄付が受け入れられることの周知を図り、同時に後援会のホームページ等に



「寄付した場合には免税優遇措置（寄付金控除）が受けられる」ことを明記して種々の寄付の促進を図る。

等でした。

以上

注)「財団法人 東京農工大学後援会寄附行為」第1章、第4条

この法人は前条の目的を達成するため、次の事業を行う

- (1)教育研究活動に対する援助
- (2)国際交流の推進に対する援助
- (3)学生（外国人留学生を含む）の修学上の諸指導に対する援助
- (4)その他前条の目的を達成するために必要な事業

同窓会にお願いしたい

梶井 功（後援会長）

1999年の天皇賞畜産部門の受賞者は、北海道天北で酪農を営んでいる池田さんだった。経産牛37頭を21haの専用放牧地と4haの採草・放牧兼地で飼っていた。牛と牧草の状態を見極めながらの15回転放牧で、牛の生理状態に合った乳牛管理を行い、経産牛1頭当たり8000kgの乳量を上げていた。日本の最北端ともいべき北緯45度の地、しかも泥炭地が8～9割というところで理想的な環境保全型草地酪農を実現している経営だった。

池田さんは同窓会とは何の関係もない。が、この素晴らしい経営の指導をしていたのが62年農学科卒業の川辺泰幸さんだったということを紹介しなかったのである。

天皇賞審査の折、池田さんに“あんた誰から指導を受けているの?”と質問したのだが、その答が“オーストラリアの川辺先生”だった。

その答を聞いた時には奇縁に驚きもし、嬉しかった。実をいうとその前の年、ラグビー部OB総会に招かれて出席したその折、川辺さんからニュージーランドで草地酪農の勉強をしたこと、今はオーストラリアに住んでいて日本へも時々指導に行くということを知っていたのである。日本でその指導を受けている当人に会い、その素晴らしい指導が天皇賞受賞に結実したのである。

“川辺さんはウチの卒業生ですよ”と池田さんや同行した農水省、道庁の方々に自慢したもののだが、こういう素晴らしい活動をされている同窓会員は、さまざまな分野で、そして各地にいらっしゃる。これは、と思われる活動をしている方々の紹介を農工通信でもしてもらえないだろうか。

遠藤章名誉教授が日本国際賞を受賞された（06.4.20）ビッグニュースである。“スタチンの発見と開発”という先生の受賞業績など、農工通信で紹介していただけたと思うが、こういう素晴らしい業績をあげた方、また川辺さんのようにユニークな仕事をされている方をお招きしての講演会を同窓会でしてもらえないだろうか。総会の記念講演としてでもいいが、やはり同窓会会員外の人たちにも聞いてもらえるような講演会のほうが望ましい。遠藤先生の講演会などは是非ともお願いしたい。

同窓会の出番です

山本 雄三（農化S33）

同窓会のあり方については、色々な観点から様々な姿があるかと思いますが、最近のように、同窓生が自分の意思と関係なく、いわばアメリカ風にリストラされるご時世になりますと、また、違った観点で考える必要があるように思われます。

企業丸抱え、終身雇用であれば、学校を出た後は、個々人が気ままにやって行けば、そこそこやれた訳ですから、学閥的な考え方で卒業後も何らかの形でフォローするにしても組織的にしっかりやる必要も無かったのですが、今日のような有様になってくると、青春の一時期の話と考えるよりも、短くても最も多感な時期を共にしたという縁（えにし）を大事に考えて、共に学んだことを深い因縁があったためと考えると、より親密に捉えてみてはどうかと思っています。

現在は寄宿舎生活も殆どありませんし、昼間教室で顔を合わす程度では、よほど気のあったメンバーでもない限り仲間意識が育たないのではないかと思います。部活で夢中になれる向きは何時だって心配は要りませんが、そうでない大多数の

学生の間には一体感も持ちにくく、何か飛びぬけたテーマでもない限り一体になって同じ学校のメンバーであるとの盛り上がりは難しいように思われます。

大学も法人化しましたし、そこそこの連帯感を持っていないと衰退する恐れがあります。大学間の競争だって厳しくなる訳ですから、やはりそれなりの工夫なりシカケが必要ではないかと思われれます。

色々な考え方がある中で、一つのアイデアとして、卒業後のフォローを真剣にきめ細かくやるというのがあってと思っています。その辺の例になるのが「慶應義塾大学」の強力な同窓意識ではないかと思っています。「面倒見のよい同窓生組織」といってよいと思います。

元々が、経済人の多い大学出身者ですが、かなり徹底していて、受験生が学校を選ぶときにまずは慶応にしとこうという向きもあるようです。勿論実力の世界ではありますが、それだけでなく、やはり学校もそれぞれカラーを持っていて、その学校に進む向きはそれなりの雰囲気を持っていると称する方もおられます。

農工大は公立ですし、私立のようには勿論いきませんが、ちょっとした工夫でかなりお金も掛けずにやれるのではないかと思います。その場合最もやりやすいポジションにいるのが同窓会だと思います。同窓会の役割の重要なものは「正確な名簿管理」ですが、一步進めて、消息管理特に仕事や業績絡みのデータフォローを手分けしてしっかりやればベースは出来ると思います。

具体的な進め方については皆さんに議論していただければよいのですが、これから考えた時、より中身の濃いデータを構築できれば、広い応用動作が出来ると思います。シゴト絡みの卒業生のデータバンクが出来るわけですから、同窓生であることの値打ちも上がることは必定です。



なお、いずれにしても、進めるには人手とそこそこの費用もかかりますから、その面の手当てがまず必要ですが、幸い、団塊の世代が定年を迎えますのでその力を役立てることも重要だと思えます。もはや、学科だの学部だのと小さい区分けで考えてはとても大所帯の学校には勝てません。是非「面倒見のよい同窓会」に変身して求心力を高めて、堂々と他の蒼々たる学校に伍して行って頂きたいと思っています。

思いつきの提案ですがご検討いただければ幸いです。

皆さんが力をあわせて取組めば出来ないはずはありません。いろいろなアイデアを持ち寄り育て、小ぶりではあるが、存在感のある大学と同窓会に是非してゆきましょう。

四国遍路体験記

門屋 一臣 (農S33)

四国には空海ゆかりの八十八か寺を白装束の遍路姿で巡拝する風習が残っている。現在は自家用車やバスで巡る人も大変多くなったが、昔と変わらず歩き遍路で巡拝をする人も多い。約1280kmの道程である。

私は愛媛大学を定年退官した年の秋、この歩き遍路に挑戦し、我が人生最高の旅を満喫した。時間に束縛されるということから完全に開放され、空海の足跡を辿る旅であった。

八十八か寺の寺々それぞれ大師堂と本堂があり、般若心経を唱えて大師と本尊の菩薩を拝む。その過程において、境内の静かな環境に包まれて、信者は心身ともに安らぎを覚えるようになる。

ところで歩き遍路として巡拝した私は道中で、すばらしい歓待を受けた。いわゆる“お接待”である。ある札所の寺にあっては、檀家の人たちが餅をついて、寺を訪れた遍路を接待して下さる。またある時は遍路道の要所でお茶のお接待やその地域で収穫した柿やミカンを提供して下さることもあった。そうして結願（八十八か寺を無事巡拝し終えること）を祈って下さるのである。

そういったお接待の中でも、私が感動したの



は、お年寄りの方によるお接待であった。遍路道を一人で歩いていると、どこからか、“おへんろさーん”と声が聞こえてくる。あたりを見回すと、遍路は私一人である。そこで立ち止まっていると、息をせきながら、追っかけて来られて、ジュースの缶を差し出して下さることもあれば、財布から千円を取り出して、“これでお昼ご飯を食べて元気を出して!”とおっしゃる。質素な身なりから判断して、決して経済的には楽でないだろうことは十分推察できる。私はふと考えた。このおばあちゃんとはまたどこかで再会して、このたびのご親切に対する御礼をすることができるだろうか。いやそれは不可能だろう。そのおばあちゃんも、ここでサービスをしておけば、後でその三倍のサービスを私から受けるなどということは全く考えておられない。まさにこのお接待は見返りを期待しない純粋なお接待なのである。このようなおばあちゃんには、遍路道中で数多くお会いすることができた。

私はこれまで、いろいろな人に親切をしてきたつもりでいた。しかし、私の頭の片隅には、この人にこれだけのことをしておけば、それなりの見返りがあるとの思い込みがあったのではないか。四国遍路を結願した後、私は考えた。とてもお接待下さったおばあちゃんのような境地にまでは到達できないであろうが、少なくとも、一歩でも近づく努力だけはしなければならないと。

四国には昔ながらの清らかな心の持ち主が実在しているのである。私にとっての四国遍路は寺の大師堂や本堂に参拝するばかりでなく、まさに生き仏に会って自分の心が清められる毎日でもあったのである。

四国遍路には人それぞれにいろいろな出会いがあるとされている。同窓のみなさんにも四国遍路を試みられてはいかがでしょうとお勧めする次第である。

ラグビー部創設の頃とその後

加藤 公朗 (林S30)

昭和26年(1951年)農学部に入學を許され勇んで武蔵野の大地に身を寄せた。

高校時代は、水泳部に所属していたが、“秋田のラグビー”は小生の憧れでもあった。高校3年生の時、校内対抗戦で7人制ラグビーに出場し優勝してしまった。それ以来、ラグビーとは縁の深い身となった。

同期の渡辺隆彦(農工)・田中初美(農化)が体育教官室よりラグビーボールを見つけて来た。空高く舞い上がる楕円球に、自然に走り寄り仲間に加えてもらった。

同志で創部の話となったが、農学部だけでは人数が足りないので、武笠先生(体育教官)を媒介人として繊維学部への勧誘が功を奏し、塩原潤一(養蚕30年卒)が繊維学部の仲間を集め参加してくれたので、10月中旬合同練習へと漕ぎつけることができた。

さっそく、東芝府中グラウンドに出向き練習試合をしてもらい、実業団チームの胸を借りた。これが、本校チームとしての初の出発であった。スポーツを通して両学部が融合したのがこれが嚆矢であろう。

当時、2年生の入交義孝(獣医29年卒)が主将となり、岡田幸助(林28年卒・現同窓会徳島県支部長)がマネージャーを買って出てくださった。メンバーが揃わないときは、岡田先輩もBKとして走った。チームをまとめた岡田先輩は創部の功績者である。昨年、春の叙勲者として会報に報じられていたが、我々にとっても誇りに思われるところである。以来、ラグビー部が消えずして存続していることは、誠にありがたいことであり、後輩達にも深く敬意を表さねばならない。

以前からOB会も毎年3月に開催し、現役との交流も続けていることは非常に喜ばしいことであり、小生も何回か参加している。

平成11年(1999年)6月19日、神田の学士会館で『創部50周年式典』が盛大に催され、多数のOBが参加しお祝いをした。



第3回 創時部OB会
愛知県犬山市 犬山城を背景にして
平成13年3月13日

感動した梶井学長は、長すぎる位の祝辞を述べられたことを覚えている。その席で、和歌山市から出席された北村禎造氏（林22年卒）のスピーチで、体育教官室に置かれていたボールは自分達が残したもので、“いつかラグビー部を創りたい一念で用意した”とのことで、一同感嘆相極まった。この執念が小生どもに繋がったものだと深く肝に銘じた次第である。

平成10年5月23日、『第1回創部時OB会』は、小生の秋田県男鹿半島で開催。以下次のような流れで続いてきている。

第2回 平成12年2月26日

山梨県「石和温泉」2年に1回の会が毎年と改める

第3回 平成13年3月13日 愛知県犬山市

第4回 平成14年3月16日

農工大グランド・OB会に参加

「新宿ワシントンホテル」へ移動

第5回 平成15年5月18日

滋賀県大津市「雄琴温泉」

第6回 平成16年5月30日

群馬県「草津温泉」

シニアOB会と名称を改める

会長に岡崎彦二郎（製糸39年卒）就任

第7回 平成17年5月29日

兵庫県「有馬温泉」

第8回 平成18年5月28日

千葉県「鴨川シーワールド」

以上のような状況で、年々参加年令を下げながら出席者を増やしている。

良き青春時代を過ごした若者は今、老骨に“ムチ”をうちながらも余生を楽しんでいる姿は、見ていても味わい深いものがあります。昔話をしている時は、青春を満喫しながらのOB会花盛りというところですよ。

母校のラグビー部が永久に引き継がれていくことを念願し筆をおきます。

—文中、部員の敬称は省略させていただきました—

中越地震の記録

布施 康正（獣畜S20）

地震は、平成16年10月23日17時56分頃発生し、川口町で最大震度7を記録したほか、県内の広い地域で5強から4が観測されました。震源は本県の北魚沼郡川口町北部にあたる北緯37.17度、東経138.52度の地下約13kmで、地震の規模はマグニチュード6.8、その特徴として強烈な揺れがあり、本震は揺れの強さを表す最大加速度が1,750ガルで同日18時34分頃の最大余震（M6.5、震源の深さ14km）では2,515ガルという観測史上最大の加速度を記録しました。その上本震の直後から6強から5弱の強い余震が繰り返し発生し12月28日までに有感地震が877回にも及んでいます。

県内の被害は死者59人、負傷者4,795人、避難者（ピーク時）10万人余り、6,400人を越える人命が失われた阪神大震災に比較した時、人命の点では農村が如何に安全であるかが浮き彫りになりました。建物では住家が約12万棟、非住家約4万棟、上越新幹線や高速道路が不通になる等、当県以外でも長野・群馬・埼玉・各県合わせて10人の負傷者があり、群馬・福島両県で1,056棟の住家一部損害等被害が発生しています。この震災では、被災地の物理的（中山間地域地すべり地帯豪雪地帯）及び社会的要因（農山村社会、過疎化高齢化など）と地震そのものの特徴とが合わさって特有の被害状況が見られたことです。建築物、公共土木・農林水産・商工関係施設等の直接被害額は約3兆円と推定され、新潟県史上最大であり、1月13日国土交通省発表によると斜面崩壊箇所数3,700、崩壊土石砂量1億立方mとあり、河道閉塞、各所にダム状態形成、自然の脅威を思い

知らされた次第です。県産業の主幹である米づくりにおいては、水稻作付不能面積が管内水田面積19,751ヘクタールの54%となり、農業への意欲を持たず呆然自失のなか17年5月には不能面積778ヘクタール、4%にまで減少させ、本地域の17年産米作況指数98、一等米比率90%の高成績で収穫を終わることができました。又、県観光産業の一つである泳ぐ宝石錦鯉の80%が地割れによる犠牲となりました。

このたびの災害に対しては、中越地方を中心とする54市町村に順次災害救助法が適用され衣・食・住確保対策が実施され、県内外の自衛隊・警察・消防等各機関の連携のもとに救出救助、物資輸送をはじめとするあらゆる応急救助活動が実施され、これらの活動と並行して電気、ガス、輸送通信、その他の公益的事業を営む法人により被災施設の応急復旧が行われました。現在でも記録的な豪雪のなか着実に被災者の生活再建が図られていますが、一方で平成18年1月現在でも2,405世帯、7,651人が仮設住宅での生活を余儀なくされており、自力での生活再建のめどがたたない世帯の解消が引き続き課題となっております。

東京農工大新潟支部被災地の会員全員に電話にて被災状況をお聞きし、お見舞いを申し上げました。管内には31名の方がおられますが、連絡とれず6件、家具散乱3件、避難生活中2件、住家基礎にひび2件、軽微5件、危険1件、不通2件、以上2月24日現在、調査連絡、中村幸夫会員より。

昭和20年獣医科卒業同級生の皆様より私にお見舞いを頂き恐縮、感謝致しております。幸い私の上越地方では相当な揺れを体感致しましたが被害は免れました。

このたびの震災に際し、海外の多くの国々、全国から寄せられました義援金、ボランティアの方々の懸命なご奉仕等、心暖まる励ましのお言葉や各種ご支援をお寄せ下さいましたことに心から感謝と御礼を申し上げますと共に世の平穏無事を祈る次第であります。



随想

屋敷野ナツ (教婦S24)

明治から昭和までの卒業生が歩いて来た、足跡を残しておきたいと言う事で、昭和57年に“絹のむすび”製糸教婦史を出版致しまして、それぞれ幾冊か知人、関係する方に読んでいただけるように、記念誌を差上げました。同窓会から原稿依頼がありましてからなかなか書き始められなくて、メきりいっぱいになってしまいました。

昔、出版した“絹のむすび”をもう一度じっくり読み返し働く女性の心意気を感じずるやらおどろきを持って中堅指導として立派に社会に貢献し、そして素敵に齢を重ねて、ボランティアや、地域の役をひき受けて頑張っておられる大勢の先輩達の御様子を、女子部の会報で勇気づけられています。私も群馬県庁を平成3年に退職してから、水墨画や習字の“かな”を習っています。夢中になれるものをみつけて頑張ることで、元気に暮して居ります。

季節ごとに自分の作品を部屋にかざって、何時まで続けられる事か、健康との勝負です。

“日本絹の里”私の家の近く金古町に県の施設として、さまざまな絹に関係する行事を行っております。友の会の会員になって体験学習など草木染め、型染め、平織り、繭クラフト、機織りなどに、参加できます。なかなかの人気です。絹の里の企画展示等、遠くから見学にこられる方も多いようです。「絹の里」と「友の会」合同の工芸展は3月17日から4月17日まで開催されます。私も是非出品したいと思っております。

出来る、出来ないの分かれ目はなにか？

WHAT IS THE KEY FACTOR FOR SUCCESS?

長島 徳明 (織化S37)

何故出来ると思えば実現し、出来ないと思うと失敗するのか、長年の疑問であった。

テレビ番組でNHKのプロジェクト-Xの人気は高い。多くの困難に立ち向かい、到底実現が難しいと思われる事を、最後には高いハードルをクリアし、成功した物語であり、ハラハラ、ドキ

ドキの後の清々しい達成感が見る人の共感を呼ぶのであろう。見ていてジーンと涙がでる事も多い。取り上げられるどのテーマも、人間的魅力に溢れるリーダーとその道のプロといえるベテランが登場する。

プロジェクトリーダーに共通しているのは、その仕事の価値を良く認識し、リーダーなりの確信と必ず実現するという固い信念を持つ。メンバーに対し単なる旗振りではなく率先垂範して事にあたり、どんな状況下でも決してギブアップせず、暗くならず、明るさとやれば必ず出来る、の信念を持っている。このようなリーダーの存在がもうだめか、と思われる状況下でメンバーに勇気を与え、やれる、やれるの大合唱を生み、このパワーが不可能を可能にしているように思われる。

さて私も会社に入ってから、自分にとってハードルの高いと思われる仕事を2、3経験した。そのような課題に臨む時、これを解決したら大きいぞ、やりがいのある仕事だ、なんとしても解決してやるぞ、と「強く思い」、解決のための「仮説」を立て、よし、こうやれば必ず解決できると思って取り組むと、結果として成功した。一方「出来そうにない」が仕事だからとにかくやろう、ぐらいの思いで取り組んだ仕事はたいした成果は得られなかった。

又火事場の馬鹿力というのがある。昭和51年9月12日、長良川の決壊による水害で、岐阜県安八町にあるポリエステルフィルムの工場があつという間に水に囲まれた。その時、普段では到底一人の力では運べない重い試験機を持ち上げた人がいて、水没をまぬがれた。どこからあのような人間業とは思われぬ力がでるのであろうか?これも疑問の一つであり、火事場の馬鹿力の存在を知った貴重な体験であった。

以来、理由は良く判らなかったが、熟慮した上で、こうすれば出来ると確信し、やれば必ず出来るの信念もって事に当たるようにしてきた。又弱

気になっている部下には、「やってやれない筈はない、やらずにやれる訳はない。必ず出来るの信念を持って事に当たれ」と言ってきたように思う。

さて長年の疑問の霧がついに晴れる日がきた。ある夏の繊維学会の特別公演で脳型コンピューターの開発をされている、理化学研究所脳科学総合研究所センターのグループ・ディレクターをされている松本元先生の話の中で、脳の働きについて更に知りたい人は、先生の著書である、岩波科学ライブラリーの「愛は脳を活性化する」を読みなさいと紹介され、公演の後早速買い求めて読み、なるほど、そうだったんだと、合点がいった。その一部を紹介したい。

- ・ 脳は「出来る」と確信する「仮説をたてる」とその確信の論理的後ろ盾をあたえるべく認知情報処理系がフル活動する。
 - ・ そのため「出来る」と確信した事は必ず出来るようになる。
 - ・ 逆に「出来ない」と確信してしまうと、脳は「出来ない」ことの論理的理由を明らかにするように働き、できる可能性をどんどん縮小する方向に働く。又確信するものが何もない場合には、脳は情報処理の向かうべき方向が与えられず混乱してしまう。
 - ・ 確信とは、脳の向かうべき方向の強固さの尺度であり、これなくしては脳は十分に働くことが出来ない。
 - ・ 確信というところに、人の脳の基本的な特性をみる事が出来る。従って確信させてくれるものが存在する事は脳にとってそのものを実現する最も重要な要素である。飛行機開発における鳥の果たした役割はこの点につきると言っても過言ではない。
- 又次のことが述べられている。人をヤル気にさせる基本が書かれていると思う。
- ・ 意欲とは脳全体に活性が高まることによって起こる心理的情況である。心は知・情・意からなると言われる。我々は情を受け入れ（価値を認めて）意が向上し（脳の活性が上がって）、知が働く（脳が働く）。脳は意欲で働くのである。特に我々は人から受け入れられ、人からわかってもらう事で意欲があがり、知が働くように作



られている。人は感情を受け止めてもらいたいために会話をし、情報やりとりするのである。人を理解するという事はその人の発した言葉の内容を理解するだけでなくその言葉の発する基盤となる感情を理解する事なのである。

・ いつも喜び感謝する気持ちがあれば、どんな事にも対処できる道を脳は生み出す事ができる。以上、私の関心のある所を抜粋したが、理由は判らずとってきた行動であるが、脳の働きから矛盾したものでなく、安堵している。

さて、以上のような脳の働きを理解した上で物事をみると合点のいく事が多い。私の良く知った人に、相手のしたほんの些細な事に対しても心から「有難う」と言葉をかける人がいる。たいした事はしてないのだが何か嬉しく、元気が出、ヤル気が出るものである。経営の神様と言われた松下幸之助さんも、現場でよく声をかけたという。「君げんきか」とか「何してるんや」とニッコリ笑って声をかけてくれると、仕事にますます意欲が湧いてきたと言う。人を本気にさせる、人を動かすとはそのような些細な事が大切なのだと思う。

最近青少年の犯罪が多くまたとても信じられないぐらいの残酷な事件が発生しており、益々低学年化しているのも心配である。知のみを強調したカリキュラム、受験戦争と良い会社に入るためのステップとしてのみ学校をとらえる風潮の世では、情の教育がないがしろにされ、ちょっとした事が動機で非行にはしったり、困難な事に出会うと投げ出してしまいう弱い心の人間を育てる事になる。親も先生も人間の脳の働きを良く勉強し、家庭での躾、学校での情の教育に活かし、夢をもつ、心の強い、明るい子供を育てる事が大変重要と思う。

最後に日本もキャッチアップの時代からお手本のないフロント・ランナーの時代に入った。脳にとっては進むべき方向が定まらない混乱状態といえる。国としても、企業としても、個人としても、進むべき方向（ビジョン）を明確に定め、確信にたる戦略を立てれば、脳は実現すべく、あらゆる知恵を総動員して、確信した事は必ず実現するであろう。ヤル気をおこさせる「怨=思いやり=相手の立場に立って物事を考え行動する事」を忘れなければ。

ビニロンのことなど

谷井 宏邦 (工化S38)

昭和38年、1963年に就職し、すでに定年退職した身から、日本の産業の変化を概観してみるのには、自分史を見るような気がする。

敗戦の後に残されたゼロに等しい日本の工業を再生しようと、多くの人在必死の努力をしていた。私が就職した昭和38年は、翌39年は東京オリンピックがあり、東海道新幹線の開業が目の前にあって、日本の工業の再生復活は間違いないものと、皆が安心し、将来への希望を持っていた時代であった。

当時の日本の工業を支えていたのは、繊維工業であった。電機産業もまだ小さく、自動車産業などはまだ揺籃の時代であった。

その当時、合繊といえばデュポンが開発したナイロンが有名であり、繊維の世界を席捲していた。そんなときに、日本にある資源、原料から合繊を作る、との思想で悪戦苦闘の末に工業化したのがビニロンである。まだ石油化学も育っていない時代ゆえ、国産資源が使えるというのは、非常なメリットであったろう。ビニロンの原料である酢酸ビニルは、初めは生石灰から得られるアセチレンを原料としていた。もちろん、アセチレンは石油産業の発達につれてエチレンに変換された。京大の桜田一郎教授の研究を基礎に、その工業化は親水性繊維の疎水化と安定化への努力であった。

就職後の工場実地研修で、ビニロン生産工場を見たが、その現場が熱と人にあふれていたのが印象的であった。まず紡糸工程では、何百となく立った紡糸筒の液中に数百の糸がきらめきながら上っていくスケールの大きさ。延伸工程では、すでに離れた場所から感じられる熱気が示す、莫大な消費エネルギーと、その工程に働く人の多さ。学校では全く見られない、工業の現場のすごさを実感した。

ビニロン製の下着を親への土産としたことがあったが、後日、洗濯すると伸びて型が変わってしまうとのクレームがあり、親水性であるが故の問題は解決できていないのだと反省した。高分子

化学、石油化学の発展につれて、ポリエステル繊維、アクリル繊維など、イージーケアに優れた合繊が現れ、ビニロンは、日常の衣料用繊維の世界では見られないものになって行った。

日本が中国とまだ国交正常化していない時代、社長である大原総一郎氏がビニロン技術を中国に提供することを実行された。氏は日本が中国に行った行為に対する贖罪である、と明言されており、融資の問題など多くの政治的問題を含む事案をよく実行できたものだと、経営者の人格と思想の大きさに感銘を受けた。氏はまた有名な文化人、思想家であり、社内で見かけるより、音楽会場で見かけることのほうが容易であり、新聞紙面で氏の意見を読むことが多かった。

ビニロンやその後の開発品である合成皮革のクラリーノにしても、その開発は容易でなく、開発費は予想をはるかに越えたものと思われる。そのような困難な事案は、サラリーマン経営者でなく、オーナー経営者でなければできないのではないかと思った。



ビニロンは衣料分野では見られなくなったが、ロープ、網、帆布などの産業分野ではしばらく頑張っていた。しかしそれらの分野でも、ポリエステルやポリオレフィン繊維などに次第に代替され、その生産量は減少して行った。

ところが、10年ほど前に、ヨーロッパからビニロンの引き合いが増えているとの話を聞き、その理由は、スレート板に使うアスベスト代替にはビニロンしかないとの評価であるとも聞いた。その前から日本でもコンクリート補強に合繊混入がテストされており、耐アルカリ性の点からビニロンがベストであることは聞いていた。その時から、アスベストの健康問題が気になっていた。ヨーロッパで急速に手を打っている問題を、なぜ日本は対処しないのかと疑問であった。最近やっとアスベスト問題が大きく扱われ始めた。しかし、上述したように、情報に適正に接する人は、以前か

らその問題は判っていたはずである。それを表明し、国民のために早期に対処するという勇気をもつ人、責任感のある人が、今日本にいるのかと、不安と寂しさを感じる。

ビニロンは、ポバールとして繊維以外に多く用途を開発しており、糊剤は繊維サイジング剤に欠かせない。またフィルムとして液晶パネルに必要な偏光膜にも使われている。老兵は消えずに、しぶとく生き残っている。

クルマが無くなる時代

今成 昌文 (機械S57)

皆様こんにちは。私は機械工学専攻の昭和59年卒業生で、現在はクルマの企画開発を生業としています。本日は日頃感じている表題テーマに関し私心を綴らせて頂きます。

■フェラーリはヤンキーのクルマ

現代は、最新フェラーリを前にして‘低くてヤンキーのクルマ(で嫌)だよな……’と素直な印象を語るごく普通の大学生が出現している時代です。

‘DSの hidroニューマチックは賢い’ ‘ポルシェはカッコいい’等々、道具としての機能美、憧れのライフスタイルイメージをクルマという存在に感じていた頃、私は専門家が多数教鞭を取っている本学に学びました。前記の出来事は‘私の知っているクルマは無くなるかもしれない’との不安を抱かせる強烈なインパクトでした。冷静に考えれば、クルマが当たり前となり環境エネルギー問題を内包し世界的に台数が増加している今こそ‘新しいクルマ’が必要とされている時代に変化して来たと言えます。

■新しいことをやろう

入社後多くのクルマ開発に携わって来ました。特に初代オデッセイ開発時は‘新しいこと’をやるという多くの貴重な体験をしました。このクルマがお客様から高く評価頂いた要素は既に雑誌等で語られているので、ここでは‘新しいこと’を当時に推進出来た原動力を私なりに整理してみました。当然、やる側に‘情熱’が無くては目標達成は不可能ですが、これと同等に重要と思わ

れた‘原動力’が三つ有りました。

【原動力1】現場を見る力

最初のハードルは工場投資の大きさでした。経験豊富な設備設計エキスパートの人が‘もしかして……’と改めてメジャーを持って現場ラインを隅々まで歩き回り、アイデアを出し改修部位を最小限とすることで、投資額減少/プロジェクトスタート判断に大きく貢献しました。ベテランの人が改めて‘現場を見る’という当たり前な行動が、ブレイクスルーに繋がる重要な行為であったと言えます。

【原動力2】やり直す力

当時、市場が収縮し二輪開発設計者が慣れない四輪開発業務に一部移動して来ました。彼らは異なる要件/手法での開発、しかも後輩よりも少ない経験年数を挽回する為に相当なパワーを発揮しました。達成目標が明確であれば何歳からでも‘やり直す力’は発揮出来るということを改めて実感しました。

【原動力3】拘りの技術力

高回転域までスムーズにパワーを出す精緻なエンジンが我が社の特徴です。この‘拘りの技術力’は、多人数乗りファミリーカーに対し余分な排気量アップを伴わずに7人乗りまでの負荷に対応出来ました。その結果、当時のミニバン中で唯一スピードリミッター装着（最高速度180km/h以上）が必要な性能を発揮出来ました。

■ブラジルに学ぶ

現代では、上記原動力以外に‘柔軟思考（知恵）’もまた‘新しいこと’の為には必要です。私がこれまでに体験した中で最も異色だった柔軟思考の一部を以下に紹介します。

日本から飛行機で約24時間。高度経済成長国として注目されるバイオ燃料先進国。けれど、深夜の交差点マナーは‘（停車⇒襲撃⇒危険の為）ノンストップ’というブラジル。そんなまだまだ豊かとはいえない国には学ぶべきの知恵が多く存在しました。

①交差点では、減速の為にスピードブレイカー（路面の凸凹）や（右側通行の国で）左方向からの直進車が無ければ右折のみ可能（左折したい場合は右折を3回繰り返す）とする交通ル

ルによって予算最小限で信号機無しの交差点インフラを整備。

②駐車場ゲートに警備員が常駐するマンションでも強盗（警備員の仲間であったり）の危険があり、防犯の為に駐車場にゲスト用の空きスペースを設置（マンション住人は絶対使わないルール）し、そこに車が停車していたら警察へ通報することで危険を回避。

等々です。

お金が無くてもたくましく生きて行けることが可能でかつ日本人には大変居心地の良い（混血人が多く差別意識が希薄で日系人の偉大な貢献を認知してる）国でした。

■過ぎたるは及ばざるが如し

多少飛躍しますが、日本では江戸時代に天才的知恵の所産である身分制度（士農工商）がありました。この制度は‘中間’に位置する‘農’と‘工’を‘国家繁栄の要’として‘士（権力）’に守られかつ‘商（商売）’から独立した立場を保障されていた点が隠し技だと聞いています（本学もこの‘国家繁栄の要’を骨格としている）。

クルマは人の欲望（本音）と正義（残念ながら往々にして建前）を満たす総合的な商品として常に権力と商売の影響を受けつつ進化/成長しています。時代進化にとり情熱とセンスとバランス感覚は重要です。私は今‘過ぎたるは及ばざるが如し’の精神で‘次世代に繋がる新しいクルマ’の答えを探求/創造し続けているところです。

最後に、この拙い文章を掲載する機会を下さった事務局の方々並びに読者の皆様に対し、無い物ねだりの忙しい‘人の世を生きる者’として多大な感謝を申し上げます。



1994年発売 初代オデッセイ

モンシロチョウの花嫁衣装

小原 嘉明 (農S39)

モンシロチョウの雄は結婚前の雌が集中しているキャベツ畑を、せっせと飛び回って雌を探す。そして嫁さん候補を見つけるや、さっと近づいて交尾を行う。では雄はどうしてそれが交尾すべき雌であると分かるのだろうか。

そこでこんな実験をする。雌の身体を覆い隠している翅を根元から切り取り、その翅と「ヌード」になった雌を並べ、雄がそのどちらに関心を示すかをみるのだ。すると雄は交尾すべきヌードの雌本体には見向きもしないで、もっぱら翅に関心を示し、しきりにそれに交尾しようとするのだ。その他、一連の実験によると、雄が相手を嫁さん候補と認知する手がかりは、雌が纏っている花嫁衣装(翅)の色であることが判明した。ただしこの色には、人間には見えない「紫外色」という隠し色が混じっている。この色がない衣装を纏ったチョウは嫁さんとは認められない。

ところが同じモンシロチョウでありながら、イギリスのモンシロチョウの雌の翅には「紫外色」がない。いうなればイギリスの雌は隠し色のない「ウェディングドレス」を纏っているのだ。これに合わせてイギリスの雄は「ウェディングドレス」を纏ったチョウを嫁さんと認知する。だから両国のモンシロチョウの国際見合いをしてもカップルは容易には生まれえない。両国の雌を並べて雄に選択させると、日本の雄は日本の雌を、イギリスの雄はイギリスの雌を選び好みするからである。

ある人の仮説によると、モンシロチョウの原産地はヨーロッパだという。そこからモンシロチョウは東に向かって少しずつ分布を広げ、ついには日本にまでたどり着いたというのだ。では、はるかなる西洋から日本への旅路のどこで、モンシロチョウの雌は「ウェディングドレス」から「花嫁

衣装」に着替えたのであろうか。ここ数年の研究から、それはユーラシア大陸の東方、中国においてであることがほぼ確かめられた。

しかしそうだとすると、雌はなぜ着替えたのか、またそれはいつのことか。興味は尽きることなく続いて果てしない。

こんな話に関心のある方は「モンシロチョウ」(小原嘉明著、中公新書)をご参照下さい。

動物医療あれこれ

金重 辰雄 (獣医S50)

東京農工大学を卒業して早いもので30数年が経過し、小動物専門病院として現在20数名の従業員(獣医師を含む)を使用、病院も横浜に2軒、千葉に1軒を運営しております。動物医療を考えたとき、人医療と異なる点があります。まず、保険制度です。経済動物の共済制度をのぞいて小動物に対する保険なるものがアメリカやイギリス等に比べて貧弱であり、かつ行き渡っていない点です。次にほとんどの動物病院がホームドクター的な意味合いが強く、また獣医師自身が専門的な診療科(たとえば、外科とか)の看板を掲げることがまずできない。3つ目に医学部のように立派な大学病院がない。我が母校のように……。

多くの動物病院が獣医師1名、AHT(動物看護師)1名という形態をとっている以上は、難易度の高い病気は大学病院などに送って飼い主の満足する治療を受けられるようにするのが理想だと思います。しかし現状は獣医学科が少人数制のためかすべてがコンパクトで、医療器械も開業とほとんど変わらないか、なかには開業医のレベルより落ちる設備で行っている国立大学の附属病院もあるようです。

最近では医学部へ入学するより獣医学科へ入学するほうが難しいと聞いており、それにしても設備や人材の面で諸外国の獣医学に追いついてもらいたいものだと思っております。

自分が開業した当時はフィラリア症と犬ジステンパーを覚えていれば、また外科は避妊や去勢手術で開業ができる時代であったが、今は、血液検査データを読んだり、X線の読影やエコーができ



なければいけなかったりで、臨床医はとても忙しく大変な職業となってしまったようです。

また最近は犬猫以外のペットを飼う方もあり、とまどうこともしばしばで、私の病院の若い先生達から聞いた話ですが、ある時小学生がカメを連れてきて、診察台にのせるなり、いきなり「レントゲンを撮ってください。卵詰まりだと思っんです。」と言ったそうで、なんで卵詰まりだと思ったのと尋ねたところ、症状から間違いないと思いますと答えたそうです。そこでレントゲンを撮ったところフィルムに卵がいっぱい詰まっているのが写っていたそうです。慌てて動物園に勤めている友人の獣医師に話をし治療法を聞いて小学生に説明したそうです。その話を聞いて若い先生達にその小学生は将来とてもいい獣医さんになると思うよ、君らも本を読んで知識を増やすのも大切なことだけど、動物の身体に直接問いかけてみたらもっと病気がわかるのではないのかい、と動物医療のおもしろさを知ったしだいです。将来の動物医療がもっと専門的になっていたとしても、基本は動物に触れ、動物に愛情をもち、対象動物の痛みや飼い主の心の苦痛を取り除くという基本的な姿勢は変わらないことと思います。

自然を大切にすることを

西尾 呂次 (名誉会長・農S17.9)

「兎追いしかの山……」と歌われている「ふるさと」から思い出される情景は、きれいな水の流れる川、四季を通じて変化のある美しい山々、金色の稲穂の波うつ田園、胸一杯に吸いたくなる空気、子ども達が野山や小川で楽しそうに遊ぶ姿など、豊かな自然、美しい景観ではないでしょうか。

我が国における農山村では、緑豊かな森林が立派に育ち、そこから流れるきれいな水と日本特有の気候風土を背景に稲作が営まれ、自然生態系を壊すことなく食料が生産され、そして国土の保全、水の供給、憩いの場の形成など、豊かな自然を守りながら社会全体に大きな貢献を果たしています。

このような農山村風景が保持されている陰には、多くの先人達のたゆまぬ努力と計り知れない

辛苦の積み重ねの賜物であることに思いをいたすと、厚い感謝の念とともに、これを守り続けてゆかなければならない責務のあることを忘れてはならないと思います。

私は、正月に藤原正彦氏の「国家の品格」を読み一層その感を深くいたしました。

著者は、「日本は今、国家の品格を失ってしまった。」と述べ、自然に対する感受性や武士道精神の復活を強く求め、品格のある国家の指標として、

- (1) 自らの意思に従って行動の出来る独立国であること。
- (2) 高い道徳心を保っていること。
- (3) 美しい田園風景が保たれていること。
- (4) 天才を生む土壌であること。

を挙げ、「美しい田園が保たれているのは、農民が金銭至上主義に冒されることなく祖国愛の情が生きることであり、また、田園風景が実に美しいイギリスでは天才が多く輩出している。」と述べています。

今日、我が国の社会では、不法不徳の人間が人の信頼を裏切るような事件が多発しております。近代的科学技術の進歩により、豊かな物質社会が実現したものの、反面、古くからの日本の美しい伝統文化や倫理道徳の理念そして自然に親しみ感謝する心が失われてきていると思えてなりません。

人類史において隆盛を極めた古代メソポタミアやギリシャなど多くの文明が繁栄を求める余り、豊かな自然を破壊し、いかに没落していったかは歴史の語るところであります。

人格形成に自然環境が大きく影響するものであることを考えると、今こそ、自然を大切にすることを育む教育(家庭・学校・社会)の充実を図るときではないでしょうか。

蚕種で生きた、島村今昔

関口 政雄 (養蚕S30)

一昨年には、紀伊山地の霊場と参詣道が、昨年7月には知床が世界遺産に加わり、テレビなどで時折取り上げられ遺産への関心が高まっている。

ここ群馬では、旧官営富岡製糸場が登録を目指し、県や富岡市は挙げて準備を進めている。ここ島村は、その遺産登録システムの一員として名を連ねている。

この村は、昔、利根川の洪水との闘いの村であった。村の中心は、利根川の中洲にあって、洪水の度ごとに危険にさらされていたが、両サイドに堤防ができ、古里を川底に残して、村民は川の南北に移住を余儀なくされたのである。しかし、その闘いの裏で川が運んだ土砂が幸いにも桑の生育に適し、しかも、歩桑（ウジバエがない桑）として蚕種製造に適した桑が穫れた。村の先達は、この桑で蚕種を生産し、これを商って村を興そうとしたのである。この先見の明は画期的なことで、このことが村の興隆の基となった。

以来、明治、大正、昭和と「島村の蚕種」として、群馬は勿論のこと、全国にまで名を馳せ、しかも、明治12年から3年間、イタリア、フランスに蚕種を直販したのである。127年前のこと。なんと50日間の船旅、正に命を懸けての商売であった。その直販の拠点を、イタリア北部ブレッシャー市に置き、因みにここはこの2月に開かれた冬のオリンピック会場トリノの近くである。これは、ただ商売だからというだけですまされる話ではないと思う。この村の風土に培った挑戦魂がそうさせたのであろうか。

蚕種輸出のため村民が横浜に往来し、外国人と接する機会が増え、キリスト教の洗礼を受ける者が多くなり、明治20年には、島村キリスト教会が設立され県内でも最も古い教会の一つに数えられている。

そして今、この村には、当時蚕種を生産した大型養蚕家屋が当時のまま相当数残っている。「何とかしたい」このまま放置しておくのは何んとしても忍びない。誰もが何とかしなければという気持ちは持ちながら成すすべもなく今となってしまった。このような中、遺産登録システムの一員として名を連ねた今、再び村を元気にする手立てはないものか、村の有志が昨年暮れに「ぐんま島村蚕種の会」（会員41名）を立ち上げ、この会が中心となって、国の「重要伝統的建造物群保存地区」（重伝建群）の指定を受けることはできないものかと、今検討中である。そして群馬には昔

のままが残る、養蚕、製糸、織物と三者が揃った一連の繋がりの中で富岡製糸場を核とした世界遺産への登録を是非成し遂げたいものである。私の夢は、かつて我が国が蚕糸王国であったときのように見渡す限りの緑の桑畑の海を見たいと思っていることである。もう叶うことはできないのであろうか。



島村の蚕種家 田島家

またぎの里『阿仁』で林業に携わって

福森 卓（環・資H8）

私事卒業以来秋田県阿仁町（現在北秋田市）に移住して早10年。林業という仕事を求めてこの地に来てからあつという間に月日が流れました。この地が『またぎの里』と呼ばれていることも知らずに来たのですが、漫画家矢口高雄氏の『釣りキチ三平』の舞台となった場所でもあり、豊かな自然の残る地域です。この地域には『比立内』や『笑内』、『米内沢』といった『内』の付く地名がよく見られます。これは、アイヌ語で『水がきれいな沢』と言う意味があるそうです。また、源平時代の落人が伝えたと言われる番楽『根子番楽』（重要無形文化財）が伝承されていたり、『伏影』という地名があることから、古くから人々が深山に分け入ってひっそり暮らしていたことがうかがい知れます。これら人々の生活は、農耕に適した土地がほとんどないために周囲の自然がもたらす恵みに頼っており、必然的に狩猟採集を中心とした『またぎ文化』が発展したのではないのでしょうか。狩猟採集をしながら、自然を支配するのではなく共存という方法で自然を守ってきた人たちであると考えます。現在も、自然と共存して生き

ていくために欲張らず、絶えず周りを見ながら自己主張をあまりしないという気質が人々に残っているように感じます。

このように阿仁という地域は、『またぎ』や『アイヌ民族』の香りが残る一方、阿仁銅山として、日本一の銅生産量を誇った場所でもありません。様々な地域から労働者が集まってくるとともに、様々な文化も流入しました。人口は最盛期で2万人を超え、祭りのときはサーカスが来るほどであったと聞いていますが、鉱山の衰退とともに人口は減り続け、現在は人口3千人台の若者の少ない超高齢化社会となっています。近隣の森林では、銅の精錬のため多くの木々が伐られ、当時アカマツやスギといった人工造林を行うことで林業が発展しました。このような土地で、私は現在、民間の林業会社に勤めていますが、林業を取り巻く状況は非常に厳しいです。

秋田といえば木目と材の色が美しい天然秋田スギで有名ですが、過伐が続き資源は枯渇寸前の状況です。現在秋田スギという名前で市場に出回っているスギは人工スギですが、ブランド力があります。山林には今後伐期を迎える秋田スギが多量にあるのですが、これらを有効に利用していくための伐採システムや加工の施設は十分とはいえません。つまり、資源はあるのに利用体制が整っていないのです。

つぎに、秋田の林業を経済面から見ると、製材品の価格は昭和50年とほとんど変わりません。伐採コストは人件費が上昇をしているにもかかわらず、作業効率の上昇や林業生産の機械化等によりコスト削減をしており、当時の97%です。製材コストの方は、当時の125%となっており、上昇のしわ寄せを山林所有者が立木価格下落という形で背負うこととなっています。その立木価格は5000円/m³を割り込み、昭和50年と比べて28%に落ち込みました。また、平均的な山林1ヘクタール伐採したときの収入は90万円ぐらいですが、その後

の植栽、手入れ、間伐との保育を行うのに補助金を利用しても1ヘクタールあたり130万円ほどかかります。さらに、育林は長い年月をも必要とするのです。マイナス投資であることは明白であり、これが秋田の林業の現状です。

今後、我々木材を生産、加工していく人間が力を合わせ、現代のニーズにあった新しい付加価値の付け方を模索しなければいけません。また、既存の利用方法の中に他の素材に換わって木材を利用できる場面がないか、消費者の求めているものを真剣に聞いて、より多くの木材を使ってもらえる環境を整備していく必要があります。また、消費者と直接繋がっている工務店やハウスメーカー、設計者等は安価で使用しやすいと言った理由だけで代換素材を選択するのではなく、木材のよさやその土地の気候に合った木材を利用すれば十分耐久性に優れていると言うことを理解し、積極的に利用してもらいたいものです。

日本の多くの山村では、産業の衰退化や人口の減少で様々な問題を抱えています。国産材が利用されることにより、林業が活性化し山村の産業が活性化されることで、山林の荒廃を防ぐだけでなく山村を救うことにもなります。山村に残されている様々な伝統や文化を残していくためにも林業は頑張らなければなりません。

阿仁では3月の終わりにもまた雪が降りました。雪国の冬は厳しいですが、春の訪れの喜びは格別なものがあります。春はどのような年も必ずやってきます。林業に携わる人々にも春の訪れがやってくることを信じ、努力していきたいと思えます。

アスベスト（石綿）

武田 博之（工化S38）

アスベストが今日大きな社会問題となっている。その企業に長年働いていた者として、各種情報と思い出を整理し、最近の状況や私なりの思いを書きました。

1. アスベストとは

原石：世界各地に、大きな塊として地中に埋



まっている。

採掘～輸入：この繊維部分を選別し、麻袋に入れたもの（原綿）が、船で日本に運びこまれる。

輸送・保管：この袋を船から貨物列車やトラックに積み換え日本各地に運ぶ。

種類と格付け：青石綿・茶石綿・白石綿に区分され、長さを数字とアルファベットで表示し区別する。

外観・状態：開綿程度により、繊維の太さが様々であり、いずれも綿状ではあるが、外観や感触がかなり異なる。

2. アスベストの利用

現在は、ほとんど使われていないが、10～40年前は大量に（年間20万トン程度）使われた。

繊維のまま利用するのが、綿、石綿糸・石綿布など綿のまま利用することもあり、長い白石綿を良く開綿して出来る細い繊維を撚ると糸となる。それを織って布などにすることも多い。

ゴムやプラスチックと混合してブレーキ・クラッチ・パッキン・ガスケットなどを作った。これらは自動車・自転車・モーター・各種配管などの部品として使われた。

セメントなどと混合して、板や、大小の管、パイプを作った。これらはビルの壁や天井などに、又水道管、電線管などとして、地下に埋め込んで使われた。また混和物がスプレー材料としてビルの柱・壁・天井などに吹き付けられて大量に使われた。

3. アスベストの特長

熱に強い、燃えない、断熱性・防音性が大きい、抗張性が大きく・摩擦に強い、耐薬品性が大きい、扱いや加工が容易、値段が安い、等など理想的な特長を持つ。古来から「魔法の鉱物」と呼ばれた所以でもある。

4. アスベストと人体

① 大気中に浮遊する微細なアスベストを吸入すると肺などに付着し、20年またはそれ以上経ってから石綿肺（塵肺の一種）、中皮腫その他の肺ガンなどをおこし、死に至ることも

多い。診断としては、問診、聴診、血液や痰の検査、X線検査・CT検査、組織検査などが行なわれる。処置としては、投薬・切除手術などがあるが効果が不十分である。

② 有害性は、青石綿が大きく、茶石綿がこれにつき、白石綿が最も少ないといわれている。

③ 発症は、吸入量が多くと期間が長い人に出やすいはずであるが、必ずしもそうとはいえない。

なお飲食しても、害は無いといわれている。また直接触れても、皮膚がかぶれたりすることは無い。

5. 健康障害に関係する主な歴史

1971年 特別化学物質等障害予防規則（通称：特化則）制定

1975年 特化則の改定（アスベストの吹きつけ禁止など）

1986年 横須賀市で、空母ミッドウエーのアスベスト廃棄物の不法投棄をきっかけに各地の学校の校舎などが調査された。その結果約1,400の建物にアスベストが使われていることが判明し、大問題となった。しかし追及が不十分であったり、適当な和解で収まってしまうことも多く、中途半端なまま、この「学校騒動」が終わってしまった。

1986年 ILO（国際労働機構）が「石綿の使用における安全に関する条約」を制定した。（この第19条に「権限のある機関及び使用者は、作業場から発散される石綿粉じんが一般の環境を汚染することを防止するために適当な措置をとる」となっている。）当時日本は様々な条件緩和を求める修正案を提出し、批准を引き伸ばし、約20年後の2005年8月にやっと批准した。

1995年 青石綿・茶石綿の使用禁止

2004年10月 白石綿の原則禁止（全面禁止は2008年？）

なお、世界各国の石綿全面禁止は、83年アイルランド、85年スエーデン、90年オーストラリア、91年オランダ、92

年フィンランド・イタリア、93年ドイツ、96年英国、などである。

2005年6月 K社での驚くべき発表があり大騒動となった。

6. 最近の社会問題

- ① K社の発表で特に注目されたのは、工場従業員のみでなく、工場との因果関係は不明としながらも、周辺住民の中皮腫患者3人に見舞金を払ったことであり、マスコミも大きく取り上げ、大騒動の幕開けとなった。
- ② その後、各地での調査が始まった。N社では、工場従業員で多数の死者が出ていた事を発表した。更に全国各地で2005年8月22日までに、様々な業種の59社でアスベストにより451名が死亡していたこと、数箇所の工場周辺にもアスベストが原因と考えられる患者が多数いることが判明した。
- ③ これらの事実より更に重大な問題が提起された。それは労災を認定された比率が非常に低く、2004年で、中皮腫と石綿ガンの死者合計約2,900人、その内労災認定は約190人のみで、特に石綿ガンでは、約3%しか認定されていない。また、下請けや日雇いの労務者などには、アスベストが原因とは判定されずに、肺の異常に苦しんでいる方々が非常に多数おられると分かった。
- ④ マスコミが大きく取り上げ、政府も調査と対策に乗り出した。その結果、まず労災の適用を受けられていない患者や家族のために、救済のための法律が作られた。すなわち、2006年3月に「石綿による健康被害の救済に関する法律略称、「石綿新法」が制定され、2006年度から適用されることとなった。

〈石綿新法の概要〉

石綿が原因で中皮腫や肺がんになった患者や死亡した人のうち、労災保険が適用されない工場周辺住民らを対象に、医療費自己負担分や療養手当（月約10万円）などを支給する。遺族には特別遺族弔意金など計約300万円を支給する。時効で労災申請できなかった労働者の遺族は、労災保険から特別遺族年金（約240万円）などを受け取る仕組み。住民や遺族の申請先は保険所か環境再生保全機構（川崎、大阪）、全国11ヶ所の環境省地方環境事務所（札幌、仙台、さいたま、新潟、名古屋、大阪、岡山、広島、高松、福岡、熊本）、労災の時効の対象者は労働基準監督署に申請する。

7. 残された問題点と私の考え

3-1、代替品

ロックウール（岩綿）、グラスファイバー（ガラス繊維）、「ビニロン」などが代替品となっている。

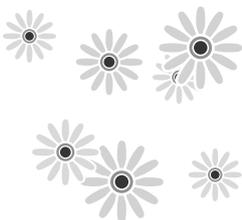
- ① 性能・価格をアスベスト同等以上にするのは、可能であろう。
- ② 但し、その代替品が健康や環境に及ぼす影響を充分検討し、明確に公表し、誤った使用方を防止するのは、理工系・医学系の関係者の重要な任務であることを忘れてはならない。

3-2、建物の改築・解体

- ① 改築・解体の際、多種多様の粉塵が飛散する。これを吸入しない手段（除塵装置や完全なマスク着用など）を徹底しなければならない。
- ② その費用は、その建物の所有者のみでなく、建築に携わった企業も少なくとも一部を負担すべきであろう。

3-3、廃棄物の投棄（処理）

- ① 解体した破片や除塵装置に集められた粉塵は、全て地中に埋めるか、完全溶解などにより、決して飛散しないような処分をする。



- ② 埋めたり、保管した場合に、その場所にアスベストの処理したことを明確な表示をする必要がある。

3-4、石綿新法と労災

- ① 両者の支給金額の違いは非常に大きい。同一にするのが適切かは難しい問題である。
- ② K社は、金額を同一にする意向を表明しているが、他者も同意するだろうか？企業により考え方に差異があっても被害者は納得できるだろうか？
- ③ 現時点ではアスベスト関連患者との係わり合いの多寡が全く異なるため、多くの病院が同一の基準で認定するのは、非常に難しい。現実には大変なことだが、早急に徹底的な研修を行なう必要がある。

3-5、粘り強い運動

1986年の学校問題やILOの条約制定の際に、きちんと対応していれば、被害がこれほど広がることは無かったであろう。今回についても、石綿新法のみで終わってしまわず、残された問題を洗い出し、アスベストに関しては世界一の対策をしていると評価されるまで、粘り強い運動を続けたい。

あとがき

最後に蛇足かもしれないが、私は、我々日本人は淡白な国民性を持っており、歴史の教訓を生かすのが不得意だと感じている。神戸地震で多数のビルが崩壊したにもかかわらず、耐震偽装問題で凶面や計算書をしっかりと見ず、官民とも偽装を見過ごしている。しつこいと言われても良いではありませんか！日本の皆さん、粘り強い運動・活動を続けましょう。



東京支部への期待

細溪 美古 (林S25)

東京支部所属の会員は誰かの言葉ではないが官から民の方々に占められその数も8,000名と聞いています。官のお勤めを終え民間で再出発された方々や大学卒業後直接民間会社に進まれ活躍されている方々です。他の支部の如く年何回かの集りは難かしいが何かの機会があれば集合する力を持っています。先般も西川公也、林田彪両代議士が同時に副大臣になられた折りに会員からの声で「両氏を励ます会」を東京都内のホテルで支部の有志が集まり独自に計画し多くの方々の御賛同を頂き250名以上の方々が集り盛会に行なわれました。その際にたまたま林田氏が内閣の防災担当副大臣であったこともあり当日参加された方の中から新潟地震の義援募金を集め大学の関係部所の方に小額ではあるが寄付しました。又大学内で講演会やパネルディスカッションも行いました。今後は私達の力で学生の就職援護にも協力したいと思っています。笑われるかも知れないが正月に行われる箱根駅伝参加も大学のPRの一役に面白いと思います。テレビ解説で出身高校は地方の農業高校、工業高校とかいっています。是非優秀な学生を本学に入学させ又海外からも入学させる等、正月3ヶ日テレビに母校の勇士を見るも楽しいものではありませんか。東京支部は発足して3年のヨチヨチ歩きを始めた支部であるが皆様の御協力で今後立派な支部に成長するよう努力する所存であります。他の支部と違った（同窓会からの還元金は頂いていません）やりかたで側面より同窓会の発展に協力して行く所存であります。宜しく御指導の程お願いしますと共に同窓会の益々の発展を祈っています。

同窓会支部会運営の課題

渡辺 寿一 (獣畜S25)

首都圏北部に位置する本県は、むかし毛野国、後に下野国として国府が置かれ国分寺・国分尼寺・薬師寺が建造され、都から伝えられた華やかな文

化が栄え、やがて中世鎌倉時代以降各地に豪族が勃興し、室町時代には「足利学校」が建造されて先人が学び、近世江戸時代に入ると下野国は大名領、旗本領、天領等に分割支配され、時の三代将軍家光は日光に東照宮を造営し、為に人物の往来が盛んになり地域の繁栄をもたらした現代に至っております。明治6年改名した栃木県は宇都宮市を中心に現在200万県民が居住しております。

さて、母校は今や輝かしい歴史と伝統を基盤に農業と工学が共存する科学技術系の大学として大いなる発展を遂げております。武蔵野の面影を色濃く残す府中キャンパス農学部5学科、そして木々の緑と四季折々の花々に恵まれた小金井工学部8学科に集う6,000余名の学生諸君に学問創造の成果を期待して止みません。

この期に当たり、支部活動は如何にあるべきか久しく問われる課題です。本県が地形、アクセス、労働力等に恵まれた首都圏として産業構造の变革に対応して発展して来たなかで、将来性のある後輩諸子の受け入れが無い筈はありません。そうした人材移入の精神的な支えを如何に構築すべきか、このことは私達支部会員に課せられた命題でもあります。

私こと、去る平成11年度より同窓会支部長に推挙され、爾来役員各位の支援を得ながら支部運営に当たって参りました。ここに活動の一部を紹介し、支部の課題解決に役立てば幸いです。

- (1) 毎年度5月開催の本部総会に支部推薦代議員として出席、参集者の母校に寄せる期待感は一層のものが窺え、加えて学長からの大学紹介は傾聴に値する内容と存じ、支部会で報告させて戴いております。
- (2) 支部会報の発行について、本県在住の同窓生は年々増加し、都道府県別で9番目の613名(17.3現在)。特に近年は産業界の動向を反映して工学系の卒業生が急増しております。そのため平成12年度より支部会報(4頁)を発行。以後年1回発行に務め事務局担当にご苦勞いただいております。このための通信費負担は大きいですが、会員相互の架け橋となれば幸いです。結びに母校同窓会の益々の発展をご祈念申し上げます。

しまなみ海道の近況

池上 正彦 (蚕糸S52)

広島県の尾道市から四国愛媛県の今治市までの瀬戸内海に点在する島々を結んでいる約60キロの自動車道がしまなみ海道です。これまで、一部路線で島の道路を利用して繋がっていましたが、今年中には全線が専用自動車として開通するため、40分ほどで瀬戸内海を渡りきることができるようになります。

しまなみ海道は、本州と四国を繋ぐ3本目の道で、徳島や香川の架橋に比べて京阪神に遠く、経済的なインパクトや知名度が小さいのですが、途中の島々に立ち寄って、瀬戸内の景色や歴史、食事などを楽しむことのできる、言わば旅の架橋です。

尾道市からは、向島、次いで因島、生口島の順に進み、県境を越えて大三島、伯方島、大島を通過して今治市まで、都合7本の橋を渡ることになります。中でも途中の伯方島の開山(ひらきやま)展望台からの風景は、多々羅大橋を眼下に離島を含めた瀬戸内に浮かぶ島々の景色を堪能させてくれます。展望台までの道は整備されているので車で上がることが出来、山頂は清潔に整備されていて、訪れる人も多くなく、桜が満開となる頃には、春の海と浮かぶ島々の絶景を堪能できます。また、伯方島には、潮が急流のように流れる船折瀬戸があり、道路沿いの展望台や傍の料亭で食事をしながら眺められます。逆潮に向かって大きな船がなかなか進めない姿から、潮流の速さを感じることができます。また、船折瀬戸の向こうには、村上水軍の本拠地であった能島が浮かんでいます。無人島のため、昔のままの姿で残っています。隣の大島の宮窪港からは、潮流体験の船が



出て、能島の岸ぎわを巧みに巡ってくれますし、水軍が本拠地とした潮流のすごさを体感して納得できます。近くの水軍博物館で鎌倉から戦国時代に活躍した海賊衆の姿を知るのも一考です。

一方、大三島では、ICを降りてすぐに三百円利用できる多々羅温泉があります。ヒノキ作りの浴室で、地下1キロから湧き出る湯につかり一息入れた後、島の西側へ向かえば10分くらいで大山祇神社を訪れることができます。天照大神の兄にあたる大山積大神を祭る、海の鎮守の社です。近くにある伯方の塩の工場を見学したり、マーレ・グロシアの塩湯と眺望を楽しむのもいいでしょう。

私も昨年、伯方島に赴任し、離島も含めた7島9町村を渡り歩きましたが、穏やかで親切な島の人達と接したり、日本にまだ残っていた懐かしく美しい風景が心に残っています。皆さんにもこの楽しみのお裾分けとして、インターネットで「しまなみグリーンツーリズム」を検索してみてください。

<http://www17.ocn.ne.jp/~shimagt/>

初めての人でも島の人が暖かく迎えてくれる体験メニューが数多く並んでいますし、しまなみの風景写真館のコーナーもあります。素朴で暖かい、おもてなしの心に触れて、のんびりと旅を楽しむ方にはお勧めです。

日本シルク学会へのお誘い

三戸森領夫（製糸S31）

蚕糸関係の「学会」は、三つあります。古くからある「日本蚕糸学会」と一番新しい「日本野蚕学会」の他に「日本シルク学会」です。

この日本シルク学会は、第二次大戦後の日本経済の復興を目指す方途として生糸の輸出振興が叫ばれ、農林省蚕糸局に技術改良課が設置されたことに端を発します。技術改良課の製糸技術班に「製糸絹繊維研究連絡会」が置かれ、国、県、民間企業、大学等78機関の研究者363名が参集しました。

その最初の活動が農林省蚕糸局、日本製糸協会、製糸絹繊維研究連絡会三者共催による第一回製糸絹繊維研究発表会の開催で、昭和26年（1951）5月横浜生糸検査所で行われました。いわば産官

学の蚕糸関係者を糾合した場における国内外の蚕糸絹業情勢と最新技術情報の共有を目指したものと いえます。

以後50年余、この、学者だけではなく、工場技術者や行政担当者を含めた経済情勢と技術情報の共有という考え方は、その後、名称が製糸絹繊維研究連絡会から製糸絹研究連絡会となり、製糸絹研究会を経て日本シルク学会となった今も変わっておりません。

変わってきたのは、会員の裾野です。学者、研究者以外には、工場技術者や行政担当者が中心であったものが、その後の蚕糸、シルクを巡る情勢の変化からシルク工房関係者、文化財保存技術関係者あるいは地域に根ざした文化活動グループなど多彩な会員が増えており、女性会員の活動も目立ってきました。

現在、日本シルク学会の活動は、12月の最初の金曜日に行われる総会、研究発表会、日本シルク学会賞授与と同時に発行される学会誌（年一回発行：研究発表会の口頭発表要約および論文を掲載）に集約されています。最近では、事務局が蚕糸科学研究所（蚕研）にある関係で総会なども東京都新宿区百人町の蚕研の研修室で行われています。

研究発表も、従来は生糸の生産を中心にしていましたがシルクを巡る最近の情勢の変化に即応して、多様な新しい生糸の製造ばかりでなく、古代の生糸の新たな製造法や製品に関するもの、高分子化学の成果としてのシルク蛋白質の利用、色繭の化粧品製造などなど多方面にわたる発表が行われております。

また、平成12年以来6年間に及ぶ活動でしたが、「製糸技術の保存事業」が8冊の本を送り出してこの3月に終了しました。

書名をNo.1から順に紹介しますと、片倉K8型自動繰糸機、恵南CEB型自動繰糸機、ニッサンHR-3型自動繰糸機、製糸工場における機械型式の変遷－松岡株式会社の場合－、グンゼ式自動繰糸機、製糸工場における機械型式の変遷－藤村製絲株式会社の場合－、乾繭機（繭乾燥機）の歩み、煮繭機の歩み、となります。

本の作り方は、機械の開発者がテキストを作成して講演し、日本シルク学会会員を中心とする学識経験者が座談会の中で質疑応答したものを速記

し、資料を整備するというものでした。いわば、機械開発者の肉声が聞こえるようにしました。

このシリーズの作成に関して本学同窓生から多大なご協力をいただきました。片倉K8型自動繰糸機では、昭和17年9月卒の森川一氏、ニッサンHR-3型自動繰糸機では、昭和31年卒の瀬木秀保氏、乾繭機（繭乾燥機）の歩みでは、昭和29年卒の長谷川茂氏、昭和25年卒の川瀬隆史氏、煮繭機の歩みでは、昭和28年卒の勝野盛夫氏がそれぞれ機械開発者としての講演、あるいは学者として通史の作成にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

このような本を通じて戦後の目覚ましい製糸機械の開発に尽力した技術者各位の努力の跡を留め、その技術哲学を後世に伝える事ができたことは、日本シルク学会の事業として格別のものがあったと自負しております。

このような日本シルク学会の活動に賛同され、興味をもたれた方は是非入会される事を期待しております。会費は、会誌込み年間2,000円、研究発表会参加費は1,000円です。会員のうち希望者には、「製糸技術の保存事業」の本を無償提供します。

問い合わせ先

〒169-0073 東京都新宿区百人町3-25-1
蚕糸科学研究所内 日本シルク学会
電話:03-3368-4891 F A X:03-3362-6210
e-mail:silk@silk.or.jp



「武蔵野山梧会会報」第47号

井上 勝弘 (林S35)

農学部林学科を昭和35年に卒業した34名は卒業に当たって二つの事を決めました。

一つは、毎年1回近況等を知らせる会報を出す事、そして、5年毎に全員集まって親睦を深めようという事でありました。昨年が卒業して45年の節目で、5月に伊豆熱川で9回目の全員集合を楽しみました。勿論、全員と言う訳にはいきませんが、学生時代の気分に入り至福の時を過ごすことができました。

タイトルの『「武蔵野山梧会会報」第47号』は本年間違いなく発行されるであろう我々の会報の表紙に記載される文字であります。卒業の年以來、一度も欠かす事なく続けられた会報も今年で47回目になります。

第1号には、創刊号と言う事もあって、黒岩菊郎、夏目正、伏谷伊一3教授から寄稿していただいています。黒岩教授は、当時の自動車免許取得ブームにかこつけて「スピードを出しすぎて事故を起こすなよ」と、夏目教授は、我々全員が「龍門に登る」事を希うと言うものでありました。伏谷教授は「同期生の文集ということ」の題で、会報発行について『我々も試みたが途絶えてしまった。「他にも2、3例を知っているが、結局のところは永続するものは無いようである」、頑張りなさい。』と、「どうせ長続きするわけ無いよ。君たちのクラスでは」とも取れる一文を頂いた。これに発奮したわけでもないが、実に46回、一度も欠かす事なく続いています。

ギネスブック物ではないかと思われるこの足跡は、実に、創刊当初から30年間に亘り幹事役を果たしてくれた馬場君のお陰であります。勿論、一緒になって支えてくれた人、引き続き幹事を引き受けてくれた荒井、岡部両君にも感謝の念一杯ありますが、卒業してからの30年間は自分の事で精一杯の時期である事を考えると、この間の幹事の献身的な運営には、只、只、頭を垂れるのみであります。

一度も欠かす事なく投稿したのは、馬場、望月両君だけで、実に敬服に至りであります。少ない

時は4名の投稿しかない時もありましたが、今では投稿者も増え、この会報が、原稿を書く事を含めて楽しく豊かな気持ちにしてくれています。

投稿数では、私も多い部類に入っていますが、忙しい時期にサボってしまい、今になって思うと残念でなりません。一種の自分史でもあるわけで惜しい事をしました。

宮崎県に居て、年1回の投稿と、5年に一度の全員集合に顔を出して、楽しんで、楽しませてもらっている私が、要請を受けてとは言え、駄文を呈するのは恥ずかしい限りであります。我々の誇りであるこの継続をまだまだ続けられたら素晴らしい事だと思い投稿しました。

市民農園国際会議に出席して

廻谷 義治 (農S38)

昨年の8月25日から28日にかけて、フランスのリヨンで第34回市民農園国際会議が開催されました。この会議は世界の市民農園関係者が3年毎に集う会議ですが、私は日本市民農園連合を代表して、10名の仲間と共に出席しました。

会議には15カ国の267名と大会運営の多数のボランティアが参加し、大変友好的に進められました。25日の午後に開会された会議は、1926年に国際組織を作ったフランス人神父アベレミールの紹介を含むプレゼンテーションと基調講演から始まり、二日目の午前中は、市民農園が①都市の生物多様性、②地域生活の向上、③市民の生活向上、にもたらす寄与についてワークショップを行いました。その午後は市内の市民農園（ジャルディンファミリアール）を5ヶ所見学し、それぞれのガーデナーと交流しました。最終日は世界遺産のリヨン市を午前中に見て周り、午後はワークショップの総括を行い次期開催国（会長国）をポーランドに決定して会議を閉じ、その夜は、ポールボキューズの宴会用レストラン“ラベイ”で美食の粋を堪能しました。

このような国際交流を行っているヨーロッパの市民農園は、産業革命の頃にイギリスで誕生し、ドイツではクラインガルテンの概念を確立し、フランスは国際組織化を進め、100年以上の歴史を

刻んでいます。この間、法制度を整え、しっかりと市民生活の中に定着させてきました。

私はこれまでに、ブリュッセル、ローザンヌ、ヨークで開催された国際会議に参加し、その間、各国の市民農園を訪問してきましたが、その都度目にしてきたものは、ヨーロッパでは様々なガーデニングが生活の一部になり、都市を耕すことが当たり前となっている様子です。このような市民生活を眺め、人々と交流し、街の広場に開設される市場などを見ていると、市民社会の落ち着きや農業への理解の深さが分かるような気がします。

今から34年前に農家の相談を受けて始めた私たちの市民農園活動も、広く認められるようになり、今では日本市民農園連合が国際組織に加入する時期を迎えています。そのためには、国内の市民農園及びその活動の組織化とネットワーク化が必要になります。

私が利用している市民農園は幸に農家が同窓生で、ヨーロッパタイプの利用者による運営管理の実現に大きな力となってきています。これが市民農園の多面的な機能を発揮する力にもなっています。市民自らが安全で新鮮な野菜を作り、環境保全やコミュニティづくりや食農教育に寄与する市民農園は、農の見える街づくりに効果的な手段となり、農業を都市住民に理解してもらう良き空間です。かつて農工大の学生さんが卒業論文のために私どもの市民農園に通ってきましたが、母校でこの市民農園のテーマを積極的に取り上げてくれることを期待している近頃です。



市民農園国際会議セレモニー リヨンの市民農園にて

「母校に帰ろうキャンペーン」へのお誘い

理系女性のためのエンパワーメントプログラム

女性キャリア支援・開発センター

東京農工大学において平成18年度科学技術振興調整費女性研究者支援モデル育成「理系女性のエンパワーメントプログラム」が採択されました。このプロジェクトは、優れた女性研究者の育成を目指しており、次の4項目の達成を目標としています。

- (1)大学として目標値を明示した男女共同参画推進のポリシーと行動計画を策定する。
- (2)女子学生や女性若手研究員をエンカレッジして研究者の道にチャレンジするように、キャリアガイダンスやメンター制度を整備する。
- (3)出産・育児・介護に伴う負担の軽減を目的として提携事業を用い、費用支援ならびに研究支援員を配置して研究の継続を強力に支える。
- (4)卒業生ネットワークを構築して「母校に帰ろうキャンペーン」を実施し、卒業生が研究生や大学院生として学ぶ、研究員や教員として雇用される等の機会を作る。

本プログラムの実行にあたり、今年度より学内に「女性キャリア支援・開発センター」を設置しコーディネータを配置して目標の達成に取り組む予定です。そこで、農工大同窓会会員の皆様に本プログラムの「母校に帰ろうキャンペーン」をご紹介します。

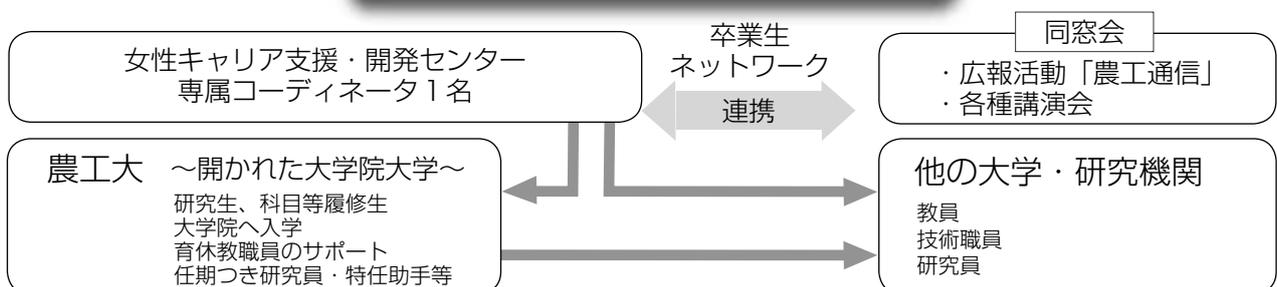
農工大の卒業生の方には、専門技術や研究経験がある優秀な人材が、結婚や出産などの個人的な事情により家庭に埋もれているケースがあると思います。「母校に帰ろうキャンペーン」では、卒業生を対象に、就職、再就職の支援を行います。具体的には、専門分野のブラッシュアップ講座や公開講演会など女性卒業生参加型のセミナーを開催し、社会人大学院生や研究生を広く受け入れ、卒業生の方々が再び学ぶ機会を提供します。さらに、就職希望の方を対象に、キャリアを生かした研究職や技術職で活躍できるようにサポートいたします。具体的には、以下の業務を予定しています。

- (1)コーディネータによる卒業生の就職・転職の相談、支援、紹介、模擬面接
- (2)学内外からの雇用の発掘（HPの作成、就職情報検索システムの構築、研究機関への求人登録）
- (3)ブラッシュアップ支援（講演会、研究生や科目等履修生等を優遇）

今後は、卒業生の皆様に「母校に帰ろうキャンペーン」へのご意見を頂き、具体的な企画・立案にもご参加いただきたいと希望しております。詳しくは、下記の窓口にご連絡ください。今後、本学HP (<http://www.tuat.ac.jp/>) において、プログラムの進行やお知らせを掲載してまいります。

＜問合せ先＞ 東京農工大学 女性キャリア支援・開発センター設置準備委員会
事務局担当：学生支援チーム
電話042-367-5828 メール gaksien@cc.tuat.ac.jp

卒業生支援ネットワークの構築 「母校に帰ろうキャンペーン」 in 農工大



平成17年度 同窓会学生援助事業報告

1. 学会発表 (109件)

農学部・農学教育部・連合農学研究科: (50件)

- (1) 瀬川沙記、物質循環環境科学専攻M1、ベトナム及びカンボジアの底質における微量元素汚染の実態解明、第14回環境化学検討会
- (2) 森彩子、物質循環環境科学専攻M1、Brassica属の植物を用いたファイトレメディエーション～重金属複合汚染水田土壌への施用～、第14回環境化学検討会
- (3) 濱田真希、物質循環環境科学専攻M1、日本に生息する鳥類の微量元素蓄積、第14回環境化学検討会
- (4) 稲田征治、連農 資源・環境学専攻D2、前処理にマイクロウェーブ加熱分解法を用いた各種環境標準試料における微量元素の回収率、第31回研究発表会、日本環境学会
- (5) 久保田裕美、連農 生物生産学専攻D3、消費者の食生活と購買行動ー東京都あきるの市のアンケート調査分析ー、2005年度日本農業経済学会大会
- (6) 皆川美紀子、物質循環環境科学専攻M2、ジワマンゲースの高レベル有機水銀蓄積とその解毒機構、第11回日本野生動物医学学会大会
- (7) 若原妙子、自然環境保全学専攻M1、丹沢堂平地区のシカによる林床植生衰退地における土壌pH値の変化、日本林学会第57回関東支部大会
- (8) 大田郁夫、地域生態システム学科B4、ガスバーナを用いた地表火再現実験、日本林学会第57回関東支部大会
- (9) 鈴木明日香、地域生態システム学科B4、栃木県唐沢山のアカマツの落雷による被害、日本林学会第57回関東支部大会
- (10) 石坂晃美、地域生態システム学科B3、マツノマダラカミキリ成虫同士のポーベリア菌感染の可能性、日本林学会第57回関東支部大会
- (11) 小林哲也、地域生態システム学科B3、東京農工大学草木演習林と府中苗圃の昆虫相の比較 (I) 甲虫目、日本林学会第57回関東支部大会
- (12) 村田健輔、地域生態システム学科B4、東京農工大学草木演習林と府中苗圃の昆虫相の比較 (II) チョウ目、日本林学会第57回関東支部大会
- (13) 宮井遼平、地域生態システム学科B4、網室内におけるマツノマダラカミキリの後食木の推移、日本林学会第57回関東支部大会
- (14) 湯本勇、生物制御科学専攻M1、標識イソプレノイド化合物の酵素的合成、植物科学調節学会第40回大会
- (15) 長谷川明子、生物制御科学専攻M1、シロイヌナズナを用いた新規2-デオキシ7-オキサラクトン型ブラシノステロイドの生合成研究、植物科学調節学会第40回大会
- (16) 小池伸介、連農 資源・環境学D1、東京都奥多摩における食肉目の糞から出現した種子と特徴、野生生物保護学会第11回大会
- (17) 宇野司、応用生命化学専攻M2、樹状細胞の抗原提示に対するIL-12の影響、第35回日本免疫学会総会・学術集会
- (18) 福土朋宏、生物生産科学専攻M2、サイズが異なる団粒での土壌有機物と微生物バイオマス、酵素活性の関係
- (19) 岩田直人、地域生態システム学科B4、多摩川の河床堆積物に含まれる種子の発芽実験による分析、第53回日本生態学会大会
- (20) 小城戸文彦、生物制御科学専攻M2、放線菌AO-4株の生産する気菌糸形成阻害物質の単離・構造決定、2006年度日本農芸化学学会大会
- (21) 池内智美、応用生命化学専攻M2、塩基性糖質との可食性ハイブリット化によるβ-ラクトブロブリンの機能改変、2006年度日本農芸化学学会大会
- (22) 高野勝也、応用生命化学専攻M2、ポルフィラン修飾による分離大豆タンパク質の安定化、2006年度日本農芸化学学会大会
- (23) 田村憲美津、応用生命化学専攻M2、アロエ由来成分による腸管感染症予防、2006年度日本農芸化学学会大会
- (24) 辻口礼華、応用生命化学専攻M2、アシル化分岐リン酸化オリゴ糖の調製と機能特性の解明、2006年度日本農芸化学学会大会
- (25) 高橋真秀、生物制御科学専攻M2、チャノココクモンハマキおよびリンゴココクモンハマキ核多角体病ウイルス6系統の病理学的特性の比較、日本応用動物昆虫学会
- (26) 藤田大悟、生物制御科学専攻M2、2種核多角体病ウイルスの病理学的特性の比較、日本応用動物昆虫学会
- (27) 水野雄現、生物制御科学専攻M2、ハマキサムライコミュバチ *Apanteles adoxophyesi* の生態的特性、日本応用動物昆虫学会
- (28) 土橋みのり、応用生物科学科B4、チャハマキ幼虫における昆虫ボックスウイルス感染がハマキサムライコミュバチの発育に及ぼす影響、第50回日本応用動物昆虫学会大会
- (29) 鈴木旭、応用生物科学科B4、カイコガにおけるノジュール形成機構の解明、第50回日本応用動物昆虫学会大会
- (30) 高瀬比菜子、応用生物科学科B4、カイコガ体液中に存在する新規C-type lectinの探索、第50回日本応用動物昆虫学会大会
- (31) 金子真、生物生産科学専攻M2、シバ放牧草地のリン動態について、2006年度日本草地学会つくば大会
- (32) 江橋香織、生物生産学専攻B4、シバ放牧草地における黒毛和種繁殖雌牛の食草行動のシバ生産量
- (33) Nguyen Loc Hien、連農 生物生産学専攻D3、Quantitative analysis of aromatic compound 2-Acetyl-Pyrroline in rice (*Oryza sativa* L.)
- (34) Hoy Taek Kim、連農 生物生産学専攻D3、Molecular characterization of two new S-Nases ('S3' and 'S32') in apple (*Malus × domestica* Borkh.)
- (35) 服部玄、連農 生物生産学専攻D1、アブラナ科におけるキメラ由来CMS系統でのオグラ型CMS特異的葉緑体ゲノム構造の検出
- (36) Gulyas Gergely、国際環境農学専攻M2、トウガラシにおけるCMSとその回復についての解析
- (37) Tatang Sopian、国際環境農学専攻M2、クワにおけるホルモン関連遺伝子のクローニング
- (38) 片野匠、国際環境農学専攻M1、接木によるトウガラシの草型変異および関連遺伝子の解析
- (39) 杉本良平、国際環境農学専攻M1、形質転換タバコにおける導入遺伝子発現の不安定性
- (40) 宮沢裕章、国際環境農学専攻M1、2種のトウガラシ *Capsicum annuum* と *C. baccatum* との種間接木により得られた接木変異の解析
- (41) 奥西麗、生物生産学専攻B4、アブラナ属雄性不稔系統におけるホメオティック遺伝子の解析
- (42) 鈴木克彰、生物生産学専攻B4、トウガラシ接木変異系統における葉形変異解析
- (43) 浦川梨恵子、連農 資源・環境学専攻D3、森林下層土のNO3-吸着による窒素流出の遅延効果、第117回日本森林学会大会
- (44) 喜多智、連農 資源・環境学専攻D3、熱帯天然林の伐採および更新による糸状菌と細菌の呼吸割合の変化、第117回日本森林学会大会
- (45) 李殷和、連農 資源・環境学専攻D1、韓国における地域別ナラ類分土壌の形態別Pの特徴、第117回日本森林学会大会
- (46) 田野、自然環境保全学専攻M2、長江上流のカルスト地域における封山育林地の微生物バイオマスと無機化活性、第117回日本森林学会大会
- (47) 花岡功大、自然環境保全学専攻M1、三宅島噴火災害地の森林土壌における窒素無機化と微生物バイオマス、第117回日本森林学会大会
- (48) 佐々木龍一、地域生態システム学科B4、三宅島噴火災害地におけるオオバヤシャブシ根粒の窒素固定活性、第117回日本森林学会大会

- (49) 筒井希実子、地域生態システム学科B4、森林土壌における直接検鏡法を用いた糸状菌・細菌別の定量、第117回日本森林学会大会
(50) 中村麻祐子、地域生態システム学科B4、暖温帯における常緑広葉樹と落葉広葉樹の落葉分解、第117回日本森林学会大会

工学部・工学教育部：(50件)

- (51) 伏間千鶴、電気電子工学専攻M1、アクティブ除振装置における圧力フィードバックの広帯域化、平成17年度電気学会全国大会
(52) 橋本幸恵、電気電子工学専攻M1、磁気浮上系のセンサレス制御、平成17年度電気学会全国大会
(53) 荒川孝俊、生命工学専攻D3、Thiobacillus thioeparus由来チオシアネート加水分解酵素のX線結晶構造解析、第5回日本蛋白質科学会年会
(54) 飯島由里子、生命工学専攻M1、Fe型ニトリルヒドラーゼにおけるシステインスルフェン酸修飾の機能解析、第5回日本蛋白質科学会年会
(55) 井出直希、生命工学専攻M1、超好熱性古細菌由来プレフォルジンN末端欠損体の基質及びシャペロニン認識への影響、第5回日本蛋白質科学会年会
(56) 杉野智加、生命工学専攻M1、分裂酵母Schizosaccharomyces pombe由来sHsp (SpHsp15.8) の構造と機能、第5回日本蛋白質科学会年会
(57) 今井悠介、電気電子工学科B4、DICOMデータから生成した全周指向性画像を表示する医用三次元表示システム、3D Image Conference 2005
(58) 松山喬、電気電子工学専攻M2、金属Zrのポスト酸化によるZrO₂薄膜の熱耐性
(59) 菊地俊介、電気電子工学専攻M1、メタル堆積+ポスト酸化HfO₂をバッファ層に用いたMFIS型ゲート構造の作製、第66回応用物理学会学術講演会
(60) 鍵本純子、生命工学専攻M1、複数のアミノ酸を成分とするイオン液体の物性評価、2005年電気化学秋季大会
(61) 村瀬寛恭、機械システム工学専攻M2、圧縮残留応力を生成する平面加工用複合加工工具の開発(第2報)、2005年度精密工学会秋季大会
(62) 安江祐介、機械システム工学専攻M2、有限要素法による切削シミュレータの開発(第2報)、2005年度精密工学会秋季大会
(63) 長尾健司、情報コミュニケーション工学専攻D1、筋束レベルからの筋肉モデリング、2005年度精密工学会秋季大会
(64) 山内玲、情報コミュニケーション工学専攻D1、DFFDを用いた顔形状変形による表情変化、2005年度精密工学会秋季大会
(65) 武石建造、応用化学専攻M2、ロジウム錯体触媒を用いた5-アルキナルのヒドロアシル化及び異性化反応、第52回有機金属化学検討会
(66) 安食香織、応用化学専攻M2、ロジウム錯体触媒による有機硫黄化合物新規合成反応の開発、第52回有機金属化学検討会
(67) 山田信吾、応用化学専攻M1、有機物共存条件下における窒素化合物の超臨界水酸化分解、化学工学会第37回秋季大会
(68) 平原孔明、応用化学専攻M2、ラクトン環を有するメタクリル酸エステル系共重合体の構造制御、Polymer Preprints, Japan Vol.54, No.2 (2005)
(69) 田口晋也、電気電子工学専攻M2、空中写真を用いた太陽光発電システム導入可能量の推定(住宅屋根の認識と日野市における事例)、平成17年度日本太陽エネルギー学会・日本風力エネルギー協会合同研究発表会
(70) 塚本和希、生命工学専攻M1、新規ビタミンD3アナログによる骨芽細胞におけるRANKL発現抑制と破骨細胞形成阻害効果、第78回日本生化学会大会
(71) 釣賀亮子、生命工学専攻M1、新しい歯周病評価系の確立ならびに骨粗鬆症治療薬の投与効果、第78回日本生化学会大会
(72) 吉野竜太、生命工学専攻M1、骨粗鬆症は歯周病のリスク因子である、第78回日本生化学会大会
(73) 西村直也、応用化学専攻M1、Ni錯体/MAO触媒系を用いた置換スチレン-環状オレフィンとの共重合、第35回石油・石油化学検討会、石油学会
(74) 内藤勇太、応用化学専攻M1、ヘキサクロロベンゼンの紫外線分解及び量子化学計算による分解経路の特定、第16回廃棄物学会研究発表会
(75) 西村健志、応用化学専攻M1、有機溶媒共存下におけるPCB蒸気の活性炭吸着特性、第16回廃棄物学会研究発表会
(76) 北澤吉満、機械システム工学専攻M2、引張・ねじり変動荷重下における非弾性変形解析、M&M2005材料力学カンファレンス、日本機械学

- 会
(77) 崎原盛、生命工学専攻M1、揮発性有機塩素化合物の嫌氣的バイオレメディエーションに関わる脱塩素化酵素遺伝子の単離と定量、日本生物工学会大会
(78) 海老澤舞子、生命工学専攻M1、揮発性有機塩素化合物の嫌氣的バイオレメディエーションを担う嫌氣的脱塩素化微生物のモニタリング、日本生物工学会大会
(79) 神前太郎、生命工学専攻M1、グループII型シャペロニン連結変異体の機能解析、第43回日本生物物理学会年会
(80) 村瀬陽介、生命工学専攻M1、超好熱菌由来シャペロニンとプレフォルジンとのアフィニティーが及ぼす基質受け渡し効率への影響、第43回日本生物物理学会年会
(81) 坂本祥、電気電子工学科B4、高密度指向性表示を用いた三次元プリントの検討、第96回日本画像学会研究討論会
(82) 西山達、機械システム工学専攻D3、Direct alignment of nematic liquid crystal molecule using atomic force microscope nano-rubbing, Optomechatronic Technology (ISO T2005)
(83) 海老澤瑞枝、機械システム工学専攻D2、Microscopic measurement system for birefringence and optical rotation distribution, Optomechatronic Technology (ISO T2005)
(84) 堀川晃玄、応用化学専攻M2、Synthesis of Polymeric Radical Scavengers via ROMP of Norbornene Derivatives and Their Antioxidation Activity, Polyolefin Workshop 2005 (APO2005)
(85) 杉浦博英、生命工学科B4、ASPE反応を利用したHandy Bio-strandによる多項目SNPs解析、第28回日本分子生物学会年会
(86) 石田圭、電気電子工学科B4、空間・時間ウィナーフィルタによる多チャンネル音声信号の雑音除去、電子情報通信学会研究会
(87) 斉藤淳史、電気電子工学科B4、SPM局所酸化法を用いたCo極薄膜へのナノリソグラフィ、2006年春季第53回学術講演会、応用物理学会
(88) 西村信也、電気電子工学科B4、Q値制御SPM局所酸化ナノリソグラフィ、2006年春季第53回学術講演会、応用物理学会
(89) 菊田健悟、電気電子工学科B4、高密度指向性表示に用いる多重結像へのダブルレンチキュラースクリーンの導入、第53回応用物理学会
(90) 柏原正広、電気電子工学科B4、半導体レーザー発振周波数の分解能計測、第53回応用物理学会
(91) 茂手木大輔、電気電子工学専攻M1、ファラデー回転素子のファイバ光学干渉計への適用性、第53回応用物理学会
(92) 浦川圭、電気電子工学専攻M2、シリコンナノ周期構造の作製、第53回応用物理学会関係連合講演会
(93) 吉田祐樹、電気電子工学専攻M2、ナノ結晶シリコンダイオードの光電子メモリ機能、第53回応用物理学会関係連合講演会
(94) 太田敦行、電気電子工学専攻M1、弾道電子エミッタの大気圧動作と安定化
(95) 河辺亮、電気電子工学科B4、空間光変調器を用いた微分処理による光パルスのチャープ測定、電子情報通信学会
(96) 星隆弘、電気電子工学科B4、周波数コム光源の高密度WDM伝送への適用性
(97) 伊藤彰彦、応用化学専攻D1、ラセミ溶液中における光学異性体の結晶化現象の検討、化学工学会第71年会
(98) 谷口祐介、応用化学専攻M2、レソルシノールの多形の析出に対する混合溶媒の影響、化学工学会第71年会
(99) 南園拓真、応用化学専攻M2、インドメタシンの非溶媒添加晶析による多形析出現象と晶析操作法、化学工学会第71年会
(100) 伊藤佳子、応用化学専攻M2、結晶粒子群の成長速度に対する懸濁条件と物性の影響、化学工学会第71年会

生物システム応用科学教育部 (BASE) : (9件)

- (101) 佐藤隆太、生物システム応用科学専攻D3、非線形摩擦特性が円運動象限突起に及ぼす影響、2005年度精密工学会秋季大会
(102) 松田礼、生物システム応用科学専攻D2、バッチ小分画法による規則的表面模様形成、2005年度精密工学会秋季大会
(103) 井出裕、生物システム応用科学専攻M2、同期精度向上のための5軸制御マニピュレータ送り駆動系の制御系設計法、2005年度精密工学会秋

季大会

- (104) 浜野瑞樹、生物システム応用科学専攻M1、切削油剤供給時の微小粒子の発生と効率的捕獲に関する研究、2005年度精密工学会秋季大会
- (105) 三森俊夫、生物システム応用科学専攻M1、リニアモータ駆動による直動ローラガイドの摩擦特性解析、2005年度精密工学会秋季大会
- (106) 矢田智彦、生物システム応用科学専攻M1、摩擦攪拌形パニング工具による表面改質、2005年度精密工学会秋季大会
- (107) 今木大輔、生物システム応用科学専攻M2、ボールガイドを用いた送り駆動系の摩擦挙動の実験的解析、2006年度精密工学会春季大会
- (108) 山元健、生物システム応用科学専攻M2、マシニングセンタの同時5軸制御運動に及ぼす幾何精度の影響、九州支部第59期総会・講演会、日本機械学会
- (109) 弓座大輔、生物システム応用科学専攻M1、5軸制御マシニングセンタの同期精度評価方法に関する研究、九州支部第59期総会・講演会、日本機械学会

2. 優秀卒業論文 (4件)

- (1) 恒川和啓 (工) 有機材料化学科、高精度複屈折測定による高分子の弾性変形挙動の評価
- (2) 松原宏文 (工) 化学システム工学科、アルマイト放電電極を用いたVOCsの分解に関する研究
- (3) 藤原雅章 (農) 地域生態システム学科、スキー場開発地域における体験プログラム事業の課題と展望～長野県飯山市斑尾高原と戸狩温泉の比較分析～
- (4) 清原琢 (工) 機械システム工学科、負荷平準型ハイパーエネルギー変換・活用システムにおける夜モードの性能評価

3. コンクール・コンテスト (10件)

コンクール等入賞

- (1) 安江祐介 (工) 機械システム工学専攻M2、切削加工のシミュレーション技術、優秀ポスター賞、第22回日本国際工作機械見本市「工作機械のニューテクノロジー」展、2005.4.11受賞
- (2) 矢田智彦 (BASE) 生物システム応用科学専攻M1、摩擦攪拌形パニング工具による表面改質、第12回卒業研究発表講演優秀賞、(社)精密工学会、2005.4受賞
- (3) 海堀理佳 (農) 自然環境保全学専攻M1、ストレスを与えたクロマツ苗木においてマツノザイセンチュウに対して発現した防御反応、日本森林技術協会理事賞 (3位)、第16回学生森林技術研究論文コンテスト、2005.5受賞

- (4) 岡村清志 (BASE) 生物システム応用科学専攻M1、低振動穴あけ加工特性、工作機械技術振興賞、第12回卒業研究発表講演会、(社)精密工学会、2005.6.20受賞
- (5) 堀川晃玄 (工) 応用化学専攻M2、インクジェットシステムを利用したパーソナル調香装置、第9回学生アイデアコンテスト第3位、東京農工大学VBL (産学連携知財センター)、2005.6.20受賞
- (6) 岡澤直輝 (工) 情報コミュニケーション工学専攻M1、理美容室向けバーチャル髪型シミュレーションサービスシステム、学生アイデア賞、第38回かわさき起業家オーディションビジネス・アイデア シーズ、2005.12.10受賞
- (7) 川崎憲広 (他4名) (工) 電子情報工学専攻D1、デザイン賞 (ローラカ部門)、環境日本一エコエネルギーコンテスト、山梨県、2005.11.20受賞

コンクール出場

- (1) 村瀬寛恭 (工) 機械システム工学専攻M2、圧縮残留応力を付与する複合加工工具の開発、第22回日本国際工作機械見本市「工作機械のニューテクノロジー」展、第11回国際工作機械技術者会議、2004.11.18

コンテスト出場

- (1) TUATFormula(工) 機械システム工学科、全日本学生フォーミュラー大会、(社)自動車技術会
- (2) 航空研究会 (工) 機械システム工学科、鳥人間コンテスト「滑空部門」、讀賣テレビ

4. 課外活動 (4件)

ミニホースの会/柔道部/ロボット研究会/準硬式野球部

5. 学園祭 (2件)

農学部/工学部 (学園祭実行委員会)

6. キャリアアドバイザー支援 (2件)

学生の皆さんが、進路や就職について個別に指導・助言を受けられるように、豊富な経験と知識を有する相談員 (キャリアアドバイザー) 2名を同窓会として支援しております。

同窓会役員等体制

会長 畑中 孝晴 (農S31) (平成17・18年度)

副会長 (平成17・18年度)

藤巻 宏 (農 S36)	宮本 譲 (獣畜S22)
草野 洋一 (養蚕S47)	西出 照雄 (製糸S41)
安藤 哲 (植防S47)	高井 英雄 (織工S31)
坂野 好幸 (農化S40)	町山 紀郎 (工化S39)
佐渡 篤 (林産S38)	新仏 利伸 (機械S46)
星野 義延 (環保S53)	宇野 亨 (電気S55)
松井 英輔 (林 S38)	藤江大二郎 (応物S49)
田内 堯 (農工S35)	岩澤 京子 (数情S56)
本間 秀和 (地生H12)	

副部長	大谷 幸利 (機シスS61) 支部担当
経理部長	堀 三計 (機械S52)
副部長	多羅尾光徳 (環保H3)
事業部長	淵野雄二郎 (農 S43)
副部長	岡山 隆之 (林産S49) 企画担当
副部長	久保 隆文 (林産S43) 分取林担当
名簿担当部長	寺岡 徹 (植防S50)
副部長	並木美太郎 (数情S59)
広報部長	桑原 利彦 (生機S57)
副部長	滝山 博志 (化工S62) HP担当
副部長	佐藤 敬一 (林産S56) HP担当
副部長	大川泰一郎 (農 S62) 会報担当
副部長	吉田 秀久 (機シスH7) 会報担当

常務理事 (平成18・19年度)

理事長	生原喜久雄 (林 S41)
副理事長	頼頼 明伯 (工化S47)
総務部長	高橋 幸資 (農化S45)
副部長	渡辺 元 (獣医S54) 総会担当
副部長	渡邊 敏行 (材シスS61) 会務担当

事務局長 山田 昭一 (元農学部事務長)

監事	伏谷 賢美 (林 S36)
	箱田 直紀 (農 S37)
	澤田 孚夫 (機械S40)



東京農工大学同窓会第43回通常総会開催される

■日時：平成18年5月27日（土）13:20～15:15 ■場所：東京農工大学農学部講堂 ■出席者：理事及び代議員 計208名（うち委任状86名）

第43回通常総会は、5月27日母校農学部キャンパスで開催された。総会に先だって理事会が開催され、理事および特別会員の推薦、副会長の推挙及び総会の議案が承認された。

生原副理事長から、出席者が定足数を越え会議が成立した旨報告があり、畑中会長を議長として通常総会に入った。畑中会長から、「今年度は、事業報告、事業計画などの通常の議事に加え会則の改正、農工通信の年一回発行、ホームページの充実等の案件もあるので議事進行に協力願いたい、また、これを承認戴いたら今年度より実施したい会則および細則等規則の改正を行い、今年度より実施することを承認願いたい。」旨の挨拶があった。続いて、来賓の小畑学長から、法人化後の厳しい状況の中で大学の現況、また、同窓会の支援に対する謝意、科学技術振興調整費による「理系女性のエンパワープログラム」の概要と、同窓会に対する協力の要請があった。出席戴いた小畑学長をはじめ来賓の方々を紹介があった。

議事

1. 議事録署名人の選任

議事録署名人に蛭木 理、町山紀郎氏を選任した。

2. 平成17年度事業報告、決算報告及び監査報告

高橋総務部長より、資料に基づき平成17年度の11項目の事業報告があり、堀経理部長より、平成17年度決算報告〔別記1〕があった。続いて、箱田監事から、報告書・帳簿・伝票等の精査を実施した結果何れも適性に処理されており、事業・業務状況も適性であること、また、個人情報の保護に関する取扱いも適正に行われている旨報告があり、何れの報告も異議なく了承された。

3. 会則および細則等規則の改正

支部の設置条項、支部長（47名）を総会構成員とする見直しおよび還元金の廃止と活動費の新設等による会則および細則等規則の改正案〔別記2〕に関し、高橋総務部長より提案があり、審議の後、異議なく承認された。

4. 理事・代議員の選任および監事の選出案

松岡理事長より前項の新たな規定に基づき、平成18年・19年度理事会推薦理事（15名）、部会推薦理事（60名）、監事（3名）、部会推薦代議員（38名）および支部推薦代議員（47名）が提案され、審議の後、何れも原案通り承認された。会長から生原新理事長および常務理事の指名があり、新旧理事長から挨拶があった。続いて、事務局長交替の説明と紹介があった。

5. 副会長の選任

松岡理事長より、理事会の推挙による機械システム工学部会の副会長の交代（残任期間）が提案され、原案通り承認された。

6. 平成18年度事業計画、予算案

平成18年度事業計画案〔別記3〕に関し、高橋総務部長から、事業計画全般、滝山広報担当理事から農工通信の年一回発行と、ホームページの充実に関してそれぞれ説明があり、何れも提案通り承認された。費目の変更を含む平成18年度の予算案〔別記4〕に関し、堀経理部長より提案の説明があり、審議の後、提案通り承認された。

7. 東京農工大学同窓会個人情報の保護に関する規則の改正案

高橋総務部長より、東京農工大学同窓会個人情報の保護に関する規則の改正

案〔別記5〕について提案説明があり、承認された。

8. 顧問の推挙

松岡理事長より、前東京支部長、前宮崎県支部長を顧問に推挙することが提案され、承認された。

9. 特別会員の推薦

松岡理事長より、理事会で推薦された特別会員が紹介された。

総会終了後、50周年記念ホールにおいて懇親会が開催された。

〔別記1〕

平成17年度収支決算報告書

（平成17年4月1日～18年3月31日）

1 基本金決算

(1) 収入

（単位：円）

款 項 目	(A) 平成17年度予算額	(B) 平成17年度決算額	(A) - (B) 増 減	備 考
前年度繰越金	301,957,875	301,957,875	0	
終身会費	2,000,000	2,865,000	-865,000	延 94名 (含、分納)
賛助会費	19,500,000	18,870,000	630,000	延 629名
合 計	323,457,875	323,692,875	-235,000	

(2) 支出

（単位：円）

特別会計繰出	3,100,000	3,000,000	100,000	会員名簿発行/事務整備
一般会計繰出	9,650,000	9,650,000	0	
特別繰出分	5,391,874	5,391,874	0	一般会計特別繰り出し(収入不足分)
合 計	18,141,874	18,041,874	100,000	

(3) 残高

（単位：円）

収入-支出	305,316,001	305,651,001	-335,000	
-------	-------------	-------------	----------	--

2 一般会計決算

(1) 収入

（単位：円）

款 項 目	(A) 平成17年度予算額	(B) 平成17年度決算額	(A) - (B) 増 減	備 考
前年度繰越金	2,748,126	2,748,126	0	
入 会 金	4,000,000	3,990,000	10,000	798 名
年 会 費	2,000,000	2,019,500	-19,500	延 1,346名
10年前納会費	900,000	900,000	0	60名
利 子	350,000	278,045	71,955	
基本金より繰入	15,041,874	15,041,874	0	
そ の 他	1,300,000	1,830,000	-530,000	名簿広告収入
合 計	26,340,000	26,807,545	-467,545	

(2) 支出

（単位：円）

款 項 目	(A) 平成17年度予算額	(B) 平成17年度決算額	(A) - (B) 増 減	備 考
事 業 費	13,510,000	11,818,288	1,691,712	

内 訳	会員名簿発行準備費	1,350,000	1,344,555	5,445	名簿データメンテナンス
	会報発行費	8,550,000	7,632,333	917,667	7月12月発行、動静はがきの目かくしシール約30万円
	新入正会員歓迎費	810,000	747,000	63,000	卒業、修了証書カバー
	母校援助費	1,700,000	882,000	818,000	
	分取林管理費	50,000	0	50,000	
	資料整備費	200,000	401,940	-201,940	パンフレット作成等
	活動費	850,000	810,460	39,540	支部総会補助金、祝金等
会 議 費	600,000	518,979	81,021	副会長・支部長懇談会費、総会懇親会費	
事 務 費	9,960,000	9,430,447	529,553		
内 訳	手 当	2,300,000	2,254,250	45,750	
	雑 給	2,700,000	2,647,225	52,775	
	備 品 費	200,000	131,752	68,248	ボイスレコーダー等
	消 耗 品 費	800,000	961,379	-161,379	
	通 信 費	600,000	628,472	-28,472	
	旅 費	2,700,000	2,345,800	354,200	総会・支部総会旅費、副会長・支部長懇談会宿泊費
	事務用品印刷費	300,000	209,903	90,097	封筒印刷、名簿カード
	慶 弔 費	60,000	106,610	-46,610	
	光 熱 水 費	200,000	55,476	144,524	同窓会事務室
	雑 費	100,000	89,580	10,420	国債購入手数料を含む
支部・部会還元金	940,000	930,900	9,100		
職員厚生積立金	100,000	100,000	0		
そ の 他	30,000	70,000	-40,000	旧会員名簿廃棄代	
予 備 費	1,200,000	0	1,200,000		
支 出 合 計	26,340,000	22,868,614	3,471,386		
次 期 繰 越 額	0	3,938,931	-3,938,931		

第24条	<p>総会の構成および運営は次のごとくとする。</p> <p>1. 総会は役員および代議員を以て構成する。但し会員は出席して意見を述べることができる。</p> <p>2. 総会は役員および代議員の過半数の出席がなければ開会することができない。ただし、総会に出席することのできない役員および代議員は委任状をもって他の出席役員または代議員にその権限を委任することができる。</p> <p>3. 総会の議決は出席役員および代議員の過半数による。ただし、会則の変更は総会出席役員および代議員の3分の2以上の同意がなければならない。(以下略)</p> <p>4. 略</p> <p>5. 特に緊急を要するときは役員および代議員の書面審議で総会にかえることができる。</p>	<p>総会の構成および運営は次のごとくとする。</p> <p>1. 総会は役員、代議員および支部長を以て構成する。ただし会員は出席して意見を述べることができる。</p> <p>2. 総会は役員、代議員および支部長の過半数の出席がなければ開会することができない。ただし、総会に出席することのできない役員、代議員および支部長は委任状をもって他の出席役員、代議員または支部長にその権限を委任することができる。</p> <p>3. 総会の議決は出席役員、代議員および支部長の過半数による。ただし、会則の変更は総会出席役員、代議員および支部長の3分の2以上の同意がなければならない。(以下略)</p> <p>4. 略</p> <p>5. 特に緊急を要するときは役員、代議員および支部長の書面審議で総会にかえることができる。</p>	<p>支部長を総会構成員とする</p>
------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------

注. 役員は会長1名、副会長若干名(部会選出)、理事100名以内、監事3名。総会構成員数は、代議員の定数を50名削減することで同様である。

細則等の改正

会則第10条第2項の理事推薦細則、会則第11条の代議員推薦細則

改正前	改正後	改正理由
<p><部会関係></p> <p>・理事推薦基準 所属会員数300名未満 2名 〃 300名以上500名未満 3名 〃 500名以上 5名</p> <p>・代議員推薦基準 所属会員数300名未満 2名 〃 300名以上500名未満 3名 〃 500名以上 5名</p>	<p>・理事推薦基準 所属会員数1,000名未満 2名 〃 1,000名以上2,500名未満 3名 〃 2,500名以上 5名</p> <p>・代議員推薦基準 所属会員数1,000名未満 1名 〃 1,000名以上2,500名未満 2名 〃 2,500名以上 3名</p>	<p>所属会員数の増加のため</p> <p>支部長を総会構成員とすることによる総会構成員の増加を抑える</p>
<p><支部関係></p> <p>・代議員推薦基準 所属会員数100名未満 1名 〃 100名以上 2名</p>	<p>・代議員推薦基準 所属会員数に関係なく各支部 1名</p>	<p>同上</p>

注. なお、副会長の推薦基準は現行のとおりです。

[別記3]

平成18年度事業計画

1 第43回通常総会・理事会の開催

平成18年5月27日(土)、本学府中キャンパスにて第43回通常総会・理事会を開催する。議事内容は、1)平成17年度事業報告、決算報告、2)総会構成員の見直し等による会則の改正(案)、3)平成18年度事業計画(案)、4)平成18年度収支予算(案)、5)顧問の推挙(案)、6)平成18年・19年度理事、代議員、監事の選任(案)、7)個人情報保護に関する規則の改正(案)、8)部会・支部還元金の廃止と活動費の新設(案)、9)その他を予定する。

2 同窓会組織強化、活性化および同窓会財務体質健全化

総会構成員の見直しによる同窓会組織の強化を図る。部会・支部・職域組織活動の活性化を図るために活動費を新設し、理事の積極的派遣を行う。常務理事会の部制の徹底により業務執行の効率を進める。収入増を図るために賛助会費増の推進や会費未納者への会費納入の督促と終身会費への切り替えを推進する。また、ペイオフ完全実施に対応するべく、定期預金を順次国債に切り替える。

3 個人情報の保護に関する対応

同窓会として、規則・規程等の一部内容を改正し対応する。

4 農工通信の発行

農工通信をA4判冊子体の年1回発行として内容の充実に努める。

5 同窓会活動とそのPR活動の充実

同窓会紹介パンフレットを見直し、ホームページの充実に向け大学と独立してホームページを開設し、会員への連絡、会員間の情報交換の充実に努める。

3 特別会計決算

(平成17年4月1日～18年3月31日)

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 事務整備費	(A)+(B)+(C) 合 計
前年度繰越金	21,997,108	708,406	0	22,705,514
繰 入 金	0	100,000	3,000,000	3,100,000
利 息	2,682	84	0	2,766
合 計	21,999,790	808,490	3,000,000	25,808,280

(2) 支出

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 事務整備費	(A)+(B)+(C) 合 計
支 出 合 計	16,821,402	0	1,854,773	18,676,175

(3) 特別会計残高

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 事務整備費	(A)+(B)+(C) 合 計
収入-支出	5,178,388	808,490	1,145,227	7,132,105

[別記2]

会則および細則等規則の改正

還元金を廃止し新に部会・支部活動費を交付する。その場合、部会活動費は基本料2万円+会員数料、支部活動費は基本料1万円+会員数料とする。

なお、千葉共済と横浜会については、従来通り支部扱いとする。

部会会員数料

支部会員数料

部会会員数料	支部会員数料
～1,800名:1万円	～500名:1万円
1,800名～3,000名:3万円	500名～1,000名:2万円
3,000名以上:5万円	1,000名～3,000名:3万円
	3,000名以上:5万円

会則の改正

	改正前	改正後	改正理由
第7条	本会には都道府県に支部をおくことができる。	本会に都道府県ごとに支部をおく。	支部を部会と同様の扱いとする
第11条	代議員の定数は200名以内において細則で定める。(以下略)	代議員の定数は150名以内において細則で定める。(以下略)	総会構成員総数を現行と同様にするため
第17条	会費の一定額を部会および支部の運営に必要な経費の補助として還元する。(以下還元金という)。	部会および支部の運営に必要な経費の補助として、部会・支部活動費を交付する。	部会・支部活動の経費的援助の改善

- 6 同窓会創立50周年記念事業
創立50周年記念事業の検討を進める。
- 7 会員動静整理の継続実施
従来通り、農工通信の未着会員について追跡調査を行い、会員の動静の把握に努める。
- 8 財団法人東京農工大学後援会への協力
後援会の事務に対する実質的支援を従来通り継続して行う。
- 9 母校及び準会員に対する援助、新入正会員歓迎行事の継続実施
学生の勉学および学生生活に関して学会発表、コンテスト・コンクール等出場・入賞祝い、優秀卒論副賞、学園祭・課外活動援助、同窓会推薦キャリア・アドバイザー支援などを継続して実施する。卒業・終了証書カバーを贈り新入正会員を歓迎する。
- 10 会員の慶弔
祝電、弔電を打電する。

事務費	8,280,000	9,960,000	-1,680,000	
手当	2,300,000	2,300,000	0	
雑給	2,700,000	2,700,000	0	
備品費	200,000	200,000	0	
消耗品費	1,000,000	800,000	200,000	
通信費	600,000	600,000	0	
旅費	800,000	2,700,000	-1,900,000	部会・支部総会派遣理事旅費等
事務用品印刷費	300,000	300,000	0	封筒印刷、名簿カード
慶弔費	60,000	60,000	0	
光熱水費	120,000	200,000	-80,000	
雑費	200,000	100,000	100,000	保険料(什器備品、事務員、情報)等
職員厚生積立金	100,000	100,000	0	
その他	100,000	30,000	70,000	
予備費	1,200,000	1,200,000	0	
支出合計	27,900,000	26,340,000	1,560,000	

3 平成18年度特別会計予算

(1) 収入 (単位:円)

款項目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(A) + (B) 合計
前年度繰越金	5,178,388	808,447	5,986,835
繰入金	0	100,000	100,000
利息	2,000	80	2,080
合計	5,180,388	908,527	6,088,915

(2) 支出 (単位:円)

款項目	会員名簿発行資金	職員厚生資金	(A) + (B) 合計
支出合計	0	324,000	324,000

(3) 残高 (単位:円)

款項目	会員名簿発行資金	職員厚生資金	(A) + (B) 合計
収入 - 支出	5,180,388	584,527	5,764,915

[別記4]

平成18年度収支予算 (平成18年4月1日~19年3月31日)

1 平成18年度基本金予算

(1) 収入 (単位:円)

款項目	(A) 18年度予算額	(B) 17年度決算額	(A) - (B) 増減	備考
前年度繰越金	305,651,001	301,957,875	3,693,126	
終身会費	2,000,000	2,000,000	0	延70余名(分納を含む)相当分
賛助会費	18,900,000	19,500,000	-600,000	延630名相当分
その他	1,145,227	0	1,145,227	H17年度特別会計事務整備費残高
合計	327,696,228	323,457,875	4,238,353	

(2) 支出 (単位:円)

特別会計繰出	0	3,100,000	-3,100,000	会員名簿発行/事務整備
一般会計通常繰出	9,450,000	9,650,000	-200,000	
特別繰出分	7,011,069	5,391,874	1,619,195	基本金より特別繰出(収入不足分)
合計	16,461,069	18,141,874	-1,680,805	

(3) 残高 (単位:円)

収入 - 支出	311,235,159	305,316,001	5,919,158
---------	-------------	-------------	-----------

2 一般会計予算

(1) 収入 (単位:円)

款項目	(A) 18年度予算額	(B) 17年度決算額	(A) - (B) 増減	備考
前年度繰越金	3,938,931	2,748,126	1,190,805	
入会金	4,000,000	4,000,000	0	800名
年会費	2,000,000	2,000,000	0	延1,300余名相当分
10年前納会費	900,000	900,000	0	60名
利子	600,000	350,000	250,000	
基本金より繰入	16,461,069	15,041,874	1,419,195	
その他	0	1,300,000	-1,300,000	
合計	27,900,000	26,340,000	1,560,000	

(2) 平成18年度支出 (単位:円)

款項目	(A) 18年度予算額	(B) 17年度予算額	(A) - (B) 増減	備考	
事業費	15,800,000	14,450,000	1,350,000		
内	会員名簿管理費	3,800,000	1,350,000	2,450,000	名簿データメンテナンス、動静はがき
	会報発行費	6,000,000	8,550,000	-2,550,000	
	HP管理作成費	150,000		150,000	HP更新年間契約料、レンタルサーバ
	部会・支部活動費	2,900,000	1,790,000	1,110,000	
	新入正会員歓迎費	800,000	810,000	-10,000	
	母校援助費	1,700,000	1,700,000	0	
内	分収林管理費	50,000	50,000	0	
	資料整備費	400,000	200,000	200,000	パンフレット作成等
	会議費	2,420,000	600,000	1,820,000	
内	総会会議費	1,820,000		1,820,000	総会懇親会費、代議員旅費
	副会長・部会支部長懇談会	450,000		450,000	昼食代、支部長懇談会宿泊費
	常務理事会議費	150,000		150,000	

[別記5]

東京農工大学同窓会個人情報の保護に関する規則等の改正

改正前	改正後	改正理由
東京農工大学同窓会個人情報の保護に関する規則(趣旨)第1条 東京農工大学同窓会(以下「同窓会」という。)は、「個人情報保護に関する法律」(平成15年法律第57号)(以下「法律」という。)に基づき、この規程において、同窓会会則(以下「会則」という。)第4条及び第5条に定めた会員及び顧問の個人情報の保護を目的として、個人情報の利用の目的の特定化、個人情報の適正な取得、正確性の確保、個人情報の提供の制限、安全管理措置及び開示・訂正・苦情の処理等の個人情報の保護に関する取扱を定める。	東京農工大学同窓会個人情報の保護に関する規則(趣旨)第1条 東京農工大学同窓会(以下「同窓会」という。)は、「個人情報保護に関する法律」(平成15年法律第57号)(以下「法律」という。)に基づき、この規程において、同窓会会則(以下「会則」という。)第4条及び第5条に定めた会員及び顧問並びに元教員の個人情報の保護を目的として、個人情報の利用の目的の特定化、個人情報の適正な取得、正確性の確保、個人情報の提供の制限、安全管理措置及び開示・訂正・苦情の処理等の個人情報の保護に関する取扱を定める。	元教員を加えるため
(利用目的の特定)第4条 四 会則第6条及び第7条に定める各支部・部会及びこれに準ずる組織(以下「支部・部会等」という。)の会員の動静の把握、総会等集会の通信に必要な当該個人情報の支部・部会等への提供	(利用目的の特定)第4条 四 会則第6条及び第7条に定める各部会・支部及びこれに準ずる組織(以下「部会・支部等」という。)の会員の動静の把握、総会等集会の通信に必要な当該個人情報の部会・支部等への提供	会則の記載順とするため
(利用目的の制限)第5条 2 前1項の規定は、次に掲げる場合は、適用しない。	(利用目的の制限)第5条 2 前1項の規定は、次に掲げる場合は、適用しない。	算用数字に訂正
(利用停止等)第16条 3 前2項に対する措置を決定したときは、本人に対して遅滞なくその旨別に定める方法により通知する。	(利用停止等)第16条 3 前2項に対する措置を決定したときは、本人に対して遅滞なくその旨別に定める方法により通知する。	算用数字に訂正

部会・支部

新潟県支部

日時 平成17年6月3日
 開催場所 クオリスビル
 支部・クラス 支部総会
 参加者数 21名
 議事内容 副会長・支部長懇談会の報告
 会計報告
 講演・討論等 会員の活躍の掲載されている
 新聞記事の紹介、懇親会



福島県支部

日時 平成17年7月2日
 開催場所 福島グリーンパレス
 派遣理事名 生原副理事長
 参加者数 38名
 議事内容 決算報告
 事業計画等
 講演・討論等 大学の近況
 情報交換



宮城県支部

日時 平成17年7月16日
 開催場所 勾当台会館
 派遣理事名 高橋総務部長
 参加者数 22名
 議事内容 第1号議案 平成16年度収入支出決算について
 第2号議案 平成17年度収入支出予算案について
 第3号議案 役員改選について
 講演・討論等 「大学の近況と同窓会の在り方」
 講師 農学部教授 高橋 幸資



神奈川県支部

日時 平成17年9月3日
 開催場所 かながわ労働プラザ9階
 レストラン味彩
 派遣理事名 淵野事業部長
 参加者数 30名
 議事内容 平成16年度決算及び監査報告、平成17年度予算案
 次期神奈川県支部役員の選出
 講演・討論等 淵野先生には、大学の近況について
 お話しいただきました。



徳島県支部

日時 平成17年10月21日
 開催場所 徳島市「笹乃庄」
 参加者数 7名
 議事内容 収支報告
 情報交換・懇親



茨城県支部

日時 平成17年10月22日
 開催場所 水戸市「水戸京成ホテル」
 派遣理事名 生原副理事長
 参加者数 51名（生原理事含む）
 議事内容 平成15～16年度事業経過並びに
 経費収支決算について
 支部役員の改選について



製糸部会女子部

日時 平成17年10月25～27日
 開催場所 芦原温泉若竹荘
 支部・クラス 製糸部会女子部
 参加者数 9名
 議事内容 女子部活動報告と
 今後の活動について
 講演・討論等 情報交換・資料館
 他見学・観光



山形県支部

日時 平成17年11月12日
 開催場所 山形イン
 参加者数 30名
 議事内容 支部役員の
 改選について



兵庫県支部

日時 平成17年11月27日
 開催場所 中央労働センター
 視聴覚室
 派遣理事名 生原副理事長
 参加者数 21名
 議事内容 松岡克己前支部長に
 感謝状の贈呈
 ブログについて
 講演・討論等 「森林と水環境について」



山梨県支部

日時 平成17年12月10日
 開催場所 ニュー機山
 派遣理事名 淵野事業部長
 参加者数 35名
 議事内容 事業報告・会計報告
 講演・討論等 「母校の近況について」・懇親会



鳥取県支部

日時 平成18年1月29日
 開催場所 湯梨浜町 水明荘
 派遣理事名 畑中孝晴同窓会長
 参加者数 11名
 畑中会長に出
 席を願い有意
 義な情報交換
 を行った



富山県支部

日時 平成18年3月11日
 開催場所 五方石本店
 (富山市桜町)
 参加者数 13名
 議事内容 平成17年度会計報告



クラス会だより

Ca43会

日時 平成17年4月16~17日
開催場所 下呂温泉
支部・クラス S43農芸化学科卒
参加者数 16名
実施事項 還暦祝い



Ca43会

日時 平成17年8月17日
開催場所 新宿美祿亭
支部・クラス S43農芸化学科卒
参加者数 16名
実施事項 和田圭二君
中国赴任壮行会



フサク会

日時 平成17年8月26~27日
開催場所 富山県越中八尾町
支部・クラス S39工業化学科卒
参加者数 20名 (台湾からも参加)
実施事項 越中おわら「風の盆」観光、ゴルフ
懇親 (高岡市観光、アルペンルート観光)
…帰路



駒場みどり会

日時 平成17年10月4日
開催場所 JR東京駅構内大丸・椿山荘
支部・クラス S23林学科卒
参加者数 14名
実施事項 (遠来の参加者)
情報交換・親睦



武蔵野38人会

日時 平成17年10月16~17日
開催場所 富岡製糸所近く
支部・クラス S26製糸学科卒
参加者数 18名
実施事項 世界遺産
候補の見学



S29蚕糸別科

日時 平成17年10月20~21日
開催場所 かんぼの宿寄居
支部・クラス S29蚕糸別科卒
参加者数 8名
実施事項 情報交換
及び親睦



糸交会

日時 平成17年10月23~24日
開催場所 美ヶ原温泉 和泉屋善兵衛
支部・クラス S31製糸科卒
参加者数 9名
実施事項 情報交換
松本市及び
安曇野観光



工学部二三会

日時 平成17年10月27日
開催場所 箱根湯元 ホテル南風荘
支部・クラス S23紡織学科卒
参加者数 8名
実施事項 会員高齢につき
最期のクラス会
となる



蚕業実科

日時 平成17年11月7~9日
開催場所 伊勢・南紀
支部・クラス S23蚕業実科卒
参加者数 7名 (夫婦同伴)
実施事項 親睦旅行



多摩留会

日時 平成17年11月9~10日
開催場所 宮崎市 青島パームビーチホテル
支部・クラス S31獣医学科卒
参加者数 10名
実施事項 情報交換と親睦



S34養蚕学科

日時 平成17年11月27~28日
開催場所 伊豆長岡温泉『ニュー八景園』
支部・クラス S34養蚕学科卒
参加者数 12名
実施事項 情報・近況交換・親睦



クラス会

掲 Kei 示 Ji 板 Ban

農工大が2006NHK大学ロボコン大会で見事優勝し、
アジア・太平洋ロボコン大会に出場。

「農工大卒業生の教育経験・キャリア・大学教育への評価に関する調査」概報

吉永契一郎（大学教育センター）

本年2月、東京農工大学大学教育センターは、東京大学教育学部矢野研究室と共同で大規模な卒業生に対する調査を行いました。同窓会および卒業生の方々には、調査にご協力いただきましたことを厚くお礼申し上げます。お蔭さまで、35.5%という高い回収率を得ることができました。

より詳細な分析、他大学との比較は今後の課題ですが、回答に見られる特徴をここで簡単に報告いたします。以前から指摘されていますように、現在の職種にかかわらず、農工大の教育においては、実験・演習・卒業研究に対する評価が高いことが明らかになりました。さらに、日本の国際化を反映して、語学教育の重要性を感じている卒業生が多いことなど、今後の教育改善に対して貴重な示唆を与えていただきました。

なお、詳細な結果については分析が終了次第、その概要を大学教育センターのホームページおよび同窓会ホームページに掲載する予定です。

■ 実施時期	2006年2月
■ 調査方法	郵送による依頼・回答
■ 調査対象	1965年より2000年までの卒業生 年度・学科を均等にして両学部からそれぞれ3000名を無作為抽出
■ 回答率	2128/6000=35.5%
■ 回答者のプロフィール	男性 85.6% 女性 14.1% 生まれ年 ~1953年 36.6% 1954年~1962年 25.3% 1963年~1979年 34.7%
■ 最終学歴	学部 69.4% 修士 24.2% 博士 5.9%

回答の特徴（評価は4点法、ノンパラメトリック2項分布、中央値を用いて検定、**は1%で有意）

<p>• 卒業研究以前に熱心に取組んだこと 実験・演習 3.02**</p> <p>• 現在の仕事 興味がある 3.18**</p> <p>• 大学時代の専門と現在の職業との関係 関係なし 31.0% 学部分野 28.5% 学科分野 25.8% 研究室分野 9.8%</p> <p>• 身に付けている能力 対人関係能力 3.07**</p> <p>• キャリアに役立った大学時代の経験 (この項目のみ10点法) 専門科目の講義 6.00** 実験・演習 6.47** 卒業論文 6.10** 研究室メンバーとの交流・会話 6.41** トータル 6.38**</p>	<p>• 卒業研究で取組んだこと 実験・演習 3.16** 研究室メンバーとの交流・会話 3.10**</p> <p>• 現在の職業 専門職 27.8% 管理職 29.6%</p> <p>• 大学時代をやり直すとしたら、取組みたい項目 専門科目の講義 3.38** 実験・演習 3.43** 論文講読 3.31** 論文執筆 3.21** 研究室メンバーとの交流・会話 3.33** 語学 3.43**</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

慶弔

慶事 お祝い申し上げます

平成17年春の叙勲
 加藤 公朗(林S 30) 旭日双光章
 真木 太一(農S 41) 紫綬褒章
 平成17年秋の叙勲
 蛭川洋一郎(農S 33) 旭日双光章
 平成18年1月の叙勲
 湯山 一(獣医S 15) 瑞宝双光章
 平成18年春の叙勲
 後閑縫之介(養蚕S 20) 瑞宝小授章
 松丸 勝二(農S 37) 瑞宝双光章

弔事 ご冥福をお祈り申し上げます

岡田 熾助(林S 18) 元徳島県支部長
 須貝 悦治(養蚕S 24) 名誉教授
 渡辺 秀夫(織化S 33) 応用分子化学部会副会長
 加藤 康雄 名誉教授
 西村 重夫 名誉教授
 近久 芳昭 名誉教授
 田中 宗信 名誉教授

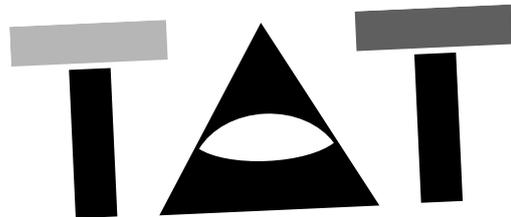
ブランドマークの紹介

東京農工大学は、MORE SENSE（使命志向型教育研究－美しい地球持続のための全学的努力）を基本理念に掲げ、循環型社会の実現に取り組んでいます。この理念を広く社会に理解してもらい、東京農工大学のブランド価値を向上させ、将来に向けてさらなる発展を目指してブランドマーク等を制定し、平成18年4月からあらゆる機会に使用することとしました。新しいブランドマークが本学を表現するのにふさわしい統一的なイメージとして、多くの方に長く愛用されて行くことを願っています。

東京農工大学の英語表記（Tokyo University of Agriculture and Technology）を基に、本学の理念とする「循環型社会の実現」をシンボル化したもので、農学（Agriculture）と工学（Technology）をグリーンとブルーの横軸で表し、循環の輪を中央に配した大変親しみやすいマークです。

ブランドマークは、朝日広告賞グランプリを始め、世界的な賞を多く受賞された、著名なアートディレクターである戸田正寿氏の制作によるもので、ブランディング・プロジェクト「UP 農工大」において議論を重ね決定しました。

ブランド
マーク



メールマガジンのお知らせ

大学では、9月から「メールマガジン」を開始し、学内の最新情報やお知らせなどを毎月1回お届けする予定です。只今、メールマガジンの「読者登録」を募集していますので、皆様のご利用をお待ちしております。登録方法は、次のとおりです。

登録方法

パソコンの場合：次のURL（登録サイト）からお申し込みください。

URL <https://mdh.fm/e?kB003BH4yw>

携帯電話の場合：次のメールアドレスに空メールを送り、返信されたURL（登録サイト）からお申し込みください。
 空メール用アドレス **tat@am.md**

※空メールとは…携帯から本文・タイトルを記入せずにメールを送っていただくことで、自動的に携帯用登録サイトのURLが返信されてくる機能です。

本件お問い合わせ先:042-367-5895（東京農工大学 広報・社会貢献チーム）

生協の白石さん

学生から生協への要望に対するユーモラスな回答が話となっている農工大生協職員の白石さんの単行本が一般書店で発売されております。どうぞ一読願います。

単行本発売中

「生協の白石さん」
著者 白石昌則
東京農工大学の皆さん
定価 1,000円 講談社

もちろん生協でも発売中！白石さんが寂しがらんで、生協の在庫は一掃してあげましょう。生協なら書籍も10% OFF！買うなら生協で。



第11回農工大全OB囲碁大会のお知らせ

昨年11月に第10回記念大会を囲碁の殿堂日本棋院にて開催。梶井功元学長をはじめ、現職の教職員、囲碁部の学生、そして全国より囲碁を愛するOBが集って親睦の輪を広げました。今年度第11回大会を下記の要領で開催致しますので、奮ってご参加下さい。蚕糸、繊維、農林、農工大全OBの碁会で棋力の強弱は問いません。弱い方大歓迎です。

1. 期 日 平成18年11月26日(日)午前9:30集合
2. 会 場 日本棋院(市ヶ谷)3F
3. 会 費 3千円
4. 連絡先 渡辺 一郎(農化院S63卒)
〒193-0833 八王子市めじろ台4-30-15 TEL 0426-64-2016
仲谷虎之助(農化S25卒)記

事務局だより

JIMUKYOKU-DAYORI

ホームページのリニューアル

ホームページを平成18年7月1日よりリニューアルいたしました。

新アドレスは、<http://tuat-dousoukai.jpn.org/>です。会員各位のご利用をお願い申し上げます。

なお、部会・支部、クラス会だより等は、徐々にホームページに移行いたしますので、データを電子媒体でお送り下さい。

名簿記載についてのお詫び

平成17年度版同窓会員名簿に記載した三井友毅氏(高分子S63)の電話番号が正しくありませんでした。この、番号におかけにならないようお願い申し上げます。

寄稿文随時募集中

寄稿内容は今回と同じです。なお、文字数はA4判1ページ1800字程度を目安にして頂くと共に、原稿については、可能な限り電子媒体でお送り下さい。詳細は事務局にお尋ね下さい。

なお、ページ数の制限の関係で今回掲載されなかった寄稿は、次回に掲載できるよう検討中で御座います。

還元金制度の廃止と活動費の新設について

先般行われました第43回東京農工大学同窓会通常総会・理事会において、還元金制度を廃止し、「部会及び支部の運営に必要な経費補助として、部会・支部活動費を交付する」改正が承認されました。本活動費は、部会・支部から交付申請を頂くことで支給することとしています。そこで、平成18年度活動費(予定のものでも可)の申請書を事務局に提出してください。確認後所定の口座に振込みます。活動費の用途について報告を求めることがあります。

なお、支部からの会費納入につきましては、従来のように還元金相当額を差し引かず全額を本部まで納入ください。

事務局長の交代

平成15年より3年にわたり、同窓会の事務局長を勤められ、当会の発展に寄与されました岡本修二氏(機機S40)は、本年5月31日付けをもって退任されました。

新事務局長には山田昭一氏(元農学部事務長)が、6月1日付けで就任しております。相変わらずのご指導ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

編 集

新生「農工通信」をお届けします。佐藤勝昭先生の暖かいタッチの水彩画が新生イメージにピッタリです。内容構成は、これまでの大学の現状動向をお伝えする路線を変更し、卒業生からの寄稿を大幅に増やし、卒業生相互の情報交換の場とすることを第一に考えました。初めての試みでしたので、どれくらい原稿が集まるのか心配でしたが、部会や支部から多数のご推薦を頂いたおかげで、あっという間に目標の28ページが埋まりました。有難うございました。締切が早すぎるとのご批判もありましたが、最初の試みということでご容赦ください。

今後は随時原稿を受け付けます(A4判1ページ1,800字程度を目安にして下さい)。新しい企画案などもお寄せください。今後ともご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

[広報部長 桑原利彦(生機S57) 記]

後 記

農工通信 第77号

発行日 平成18年(2006年)8月1日

発行所 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1

東京農工大学同窓会事務局

TEL 042 (364) 3328

FAX 042 (335) 3500

e-mail info@tuat-dousoukai.jpn.org

http://tuat-dousoukai.jpn.org/

振替口座 00120-9-93147番(加入者負担)

加入者名 東京農工大学同窓会

印刷所 小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分県大分市松原町2-1-6

もう一度母校で学んでみませんか

農工大 MOT 学生募集

MOTって?

MOTは、技術を事業化するための知識とスキルを身につけるための大学院です。
農工大では、2005年4月に専門職大学院 MOT を開設いたしました。

農工大 MOT は技術リスクマネジメントに重点を置いています。

詳しくは、<http://www.tuat.ac.jp/%7Ermmot/> をご参照ください。

- 試験日：①2006年 9月 9日(土)～ 9月10日(日)
- ②2006年12月 9日(土)～12月10日(日)
- ③2007年 2月10日(土)～ 2月11日(日)

出願期間など詳しくは、

<http://www.tuat.ac.jp/~rmmot/exam/index.html>
をご参照ください

農工大MOT第2回入試説明会

- 日時 10月21日(土) 14:00～17:00 (受付開始 13:30)
- 場所 田町 キャンパスイノベーションセンター 5階
(<http://www.tuat.ac.jp/~rmmot/access.html>)